和歌山市文化体育振興事業団調査報告書　第25集

史跡和歌山城　第22次発掘調査概報

2000

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

今回発送の第25集『史跡和歌山城 第２２次発掘調査概報』の２ヶ所に誤植があります。
お手数ですが訂正方お願いいたします。

《正　誤　表》

		（誤）	（正）
Ｐ８	８行	礎石4・5は赤変して	礎石5・6は赤変して
Ｐ17	９行	「湊行原」	「湊片原」

序　文

和歌山城の立地する和歌山市は、和歌山県の北部に位置し、奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川によって運ばれた土砂により形成された和歌山平野を中心とした地域であります。和歌山城はその紀ノ川南岸平野部に位置しています。和歌山城の築城は天正13（1585）年、豊臣秀吉の命により行われ、慶長５（1600）年からの浅野氏を経て、元和５（1619）年に徳川頼宣が入城してからは御三家の一つ紀州徳川家の居城となります。現在は公園として整備され、和歌山市民の憩いの場となっております。

今回の調査は二の丸庭園西側堀の浚渫工事に伴って行われたものです。調査の結果、絵図に描かれている「御橋廊下」の橋脚部分を確認することができ、その基礎は礎石の周りを板材で囲んで補強するという特殊な構造であったことが明らかになりました。

ここに報告する概要報告書が、地域の歴史の解明に活用されれば幸いです。本書が広く私たちの郷土に関する歴史知識を豊かにすることを願ってやみません。

最後になりましたが、調査にあたり御指導、御協力を頂きました関係各位の皆様に深く感謝いたします。

平成12年３月31日

財団法人　和歌山市文化体育振興事業団

理事長　伊　藤　　明

例　言

1. 本書は、和歌山市が計画した和歌山市一番丁３番地に所在する和歌山城二の丸庭園西側堀の浚渫工事に伴う発掘調査の概要報告書である。
2. 調査は、和歌山市の委託事業として財団法人和歌山市文化体育振興事業団が受託し、対象面積約500㎡を1999年12月22日から2000年３月13日までの期間で実施した。
3. 発掘調査及び報告書刊行に係わる事務局は下記のとおりである。

和歌山市教育委員会

教育長	山口喜一郎
文化振興課長	久保隆司
文化財班長	小原保誠
学芸員	益田雅司

財団法人和歌山市文化体育振興事業団

理事長	伊藤　明
事務局長	藤田光彦
総務課長	川嵜健治
主　事	西山佳宏（調査庶務担当）
学芸員	髙橋方紀（発掘調査担当）

4. 本概報掲載の遺跡・遺構及び遺物写真撮影は髙橋が行った。
5. 本書の執筆は発掘調査担当の髙橋の他、同財団学芸員北野隆亮、奥村薫、川口修実が分担し、編集は髙橋が行った。各執筆分担の文責は目次に示した。
6. 写真図版の遺物に付した数字番号は実測図番号に対応する。
7. 瓦の名称・計測部位等については、和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第22集の凡例に準拠した。
8. 本書に用いた石垣立面図のうち、堀に面する石垣部分は和歌山市産業部和歌山城管理事務所から提供を受けたものである。関連絵図に関しては、和歌山市立博物館の御配慮を得て御橋廊下に関する一連の絵図（中村努氏所蔵、同館寄託品）を掲載させていただいた。また和歌山県立図書館の許可を得て『和歌山御城内惣御絵図』（同図書館蔵）の一部を掲載させていただいた。御配慮に感謝の意を表します。
9. 御橋廊下の絵図については和歌山市立博物館館長三尾功氏、寺西貞弘氏、高橋克伸氏の御教示を得た。出土木材の材質や銅板等の部材に関しては財団法人和歌山県文化財センター文化財建造物課課長鳴海祥博氏並びに有限会社建築文化研究所八木清勝氏に、礎石のものとみられる石材片の石種鑑定等については大阪府八尾市立曙川小学校教諭奥田尚氏にそれぞれ御教示を得た。また石垣については奈良県立橿原考古学研究所共同研究員北垣聰一郎氏の御教示を得た。記して感謝申し上げます。
10. 概要報告書の作成にあたり、関係機関等の方々に有益な御教示・御指導を賜ったことに感謝の意を表します。

本文目次

1．調査の契機と経過……（髙橋方紀）…… 1

2．位置と環境……（ 〃 ）…… 2

3．既往の調査……（北野隆亮）…… 4

4．調査の方法と経過

（1）調査の方法……（髙橋）…… 6

（2）調査の概要……（ 〃 ）…… 7

5．遺構

（1）第１区……（髙橋）…… 8

（2）第２区……（ 〃 ）……12

（3）第３区……（ 〃 ）……12

6．遺物

（1）土器・陶磁器……（川口修実）……15

（2）瓦……（奥村　薫）……18

（3）土製品……（ 〃 ）……19

（4）金属製品……（髙橋）……19

（5）木製品……（ 〃 ）……21

7．まとめ

（1）橋脚遺構について……（髙橋）……23

（2）周辺石垣について……（ 〃 ）……26

報告書抄録…… 28

図版目次

図版１　調査地遠景（東から）、第１区 調査前の状況（東から）

図版２　第１区 全景（東から）、第１区 全景（北から）

図版３　第１区 多聞櫓礎石近景（南東から）、SV－１ 刻印１、SV－１ 刻印２

図版４　第２区 調査前の状況（西から）、第２区 全景（西から）

図版５　SV－４ 裏込石検出状況（西から）、第２区 サブトレンチ１土層堆積状況（南から）

図版６　第３区 調査前の状況（南東から）、第３区 全景（上が北）

図版７　第３区 橋脚遺構（上が北）、第３区 橋脚遺構（南東から）

図版８　第３区 橋脚遺構（東から）、第３区 基礎Ｂ２（西から）

図版９　第３区 基礎Ｃ４（西から）、第３区 基礎Ｂ４・Ｃ４（南から）

図版10　第３区 基礎Ｂ４タガ検出状況（西から）、第３区 サブトレンチ２土層堆積状況（北西から）

図版11　第３区 サブトレンチ３土層堆積状況（北西から）、 第３区 サブトレンチ４土層堆積状況（東から）

図版12　SV－３ 構築状況（北から）、SV－２・３ 隅角部構築状況（北西から）

図版13　肥前系陶磁器、堺焼、丹波焼、備前焼、土師質土器、焼塩壺、産地不明陶器

図版14　肥田前系陶磁器、備前焼、産地不明陶器、軒丸瓦、軒平瓦

図版15　軒平瓦、丸瓦、平瓦、面戸瓦、棟込瓦、塼

図版16　土人形、泥面子、銭貨、鎹、楔、釘

図版17　銅板、漆器

図版18　下駄、木履、こけら板、込栓、不明木製品、板材

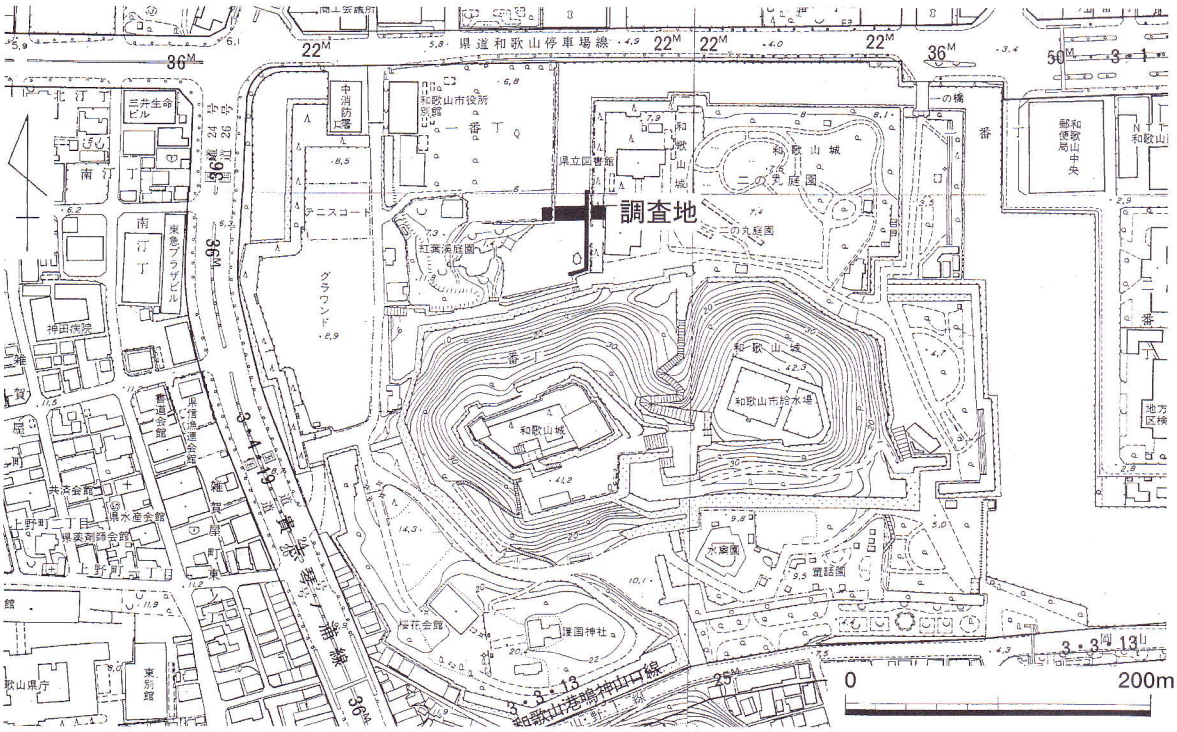
１．調査の契機と経過

国指定史跡である和歌山城は、紀ノ川下流域南岸の平野部に存在する独立丘陵、岡山に築かれた平山城である。今回、和歌山市が二の丸庭園西側堀の浚渫工事を実施することになり、この工事に伴って発掘調査が行われることになった。調査は和歌山市教育委員会の指導のもとに、同市から財団法人和歌山市文化体育振興事業団が委託を受けて実施したものである。

調査地はこの堀に架けられていたとされる「御橋廊下」の取り付き部分、堀内部の推定地と周辺の石垣裾部である（第１図、図版１・４・６）。橋の取り付き部分についてはすでに第５・７次調査が行われているが、調査面積の制限と遺構面保護のため下面の状況は明らかにされていない。そのため今回は調査範囲を拡張して、深掘調査を含めた再調査を行うこととなった。御橋廊下は『和歌山御城内惣御絵図』、『二ノ丸御橋廊下桁行弐拾歩一建地割』他３枚の絵図（第24・25図参照）からその架橋位置と外観をうかがうことができるが、関連する文献史料を見いだすことはできず、水面下の状況や構築年代など不明な点が多い。

調査は約３ヶ月の期間で行い、そのうち第１区は平成11年12月22日から平成12年１月20日、第３区は１月31日から２月22日、第２区は２月23日から３月13日の期間を要した。全景写真に関してはラジコンヘリによる空中写真撮影を行い、第１・３区を２月14日、第２区を３月３日にそれぞれ実施した。また２月５日には現地説明会を開催し、参加者は約200名を数えた（写真１）。

写真１　現地説明会風景



第１図　調査位置図

2．位置と環境

和歌山市は和歌山県の北西端に位置しており、北は和泉山脈を境として大阪府泉南郡岬町・阪南市、東は和歌山県那賀郡岩出町・貴志川町、南は海南市に隣接している。奈良県の大台ヶ原に源を発する紀ノ川は、本市のほぼ中央を西流して紀伊水道に注いでおり、その過程で運ばれた土砂によって形成された沖積平野が和歌山平野である。古代においては、磯ノ浦から海岸線に沿って大規模な砂州が形成されており、このために紀ノ川は狐島付近で大きく屈曲して和歌浦湾に注いでいたとされている。この海岸砂州に位置する独立丘陵、岡山に和歌山城は築かれている（第２図）。

周辺の遺跡を概観すると、縄文時代の遺跡として鳴神貝塚（19）、禰宜貝塚が知られている。鳴神貝塚からは縄文時代中期から晩期の土器が多く出土しているが、その貝層の中に海水系の貝殻が多くみられることから、当時の海岸線は同遺跡周辺の岩橋山塊西麓あたりまで及んでいたと推定されている。弥生時代になると遺跡の数は増加し、太田・黒田遺跡（10）・秋月遺跡（13）を始めとする集落が平野部に展開するようになる。古墳時代においても鳴神遺跡群や友田町遺跡（７）、田屋遺跡、西田井遺跡などの集落が平野部に営まれ、鳴神Ⅴ遺跡（15）では水田跡が検出されている。また秋月遺跡で確認された前方後円墳のように、集落の周辺に存在した墓域が山麓に移行し、岩橋千塚古墳群（23）などを形成するようになる。

奈良時代になると南海道に面する形で直川廃寺跡や上野廃寺跡、山口廃寺跡等の寺院が建立される。太田・黒田遺跡では銭貨や斎串などを出土した井戸の他、奈良時代の瓦や須恵器の円面硯が出土しており、官衙の存在が推定されている。また鳴神Ⅴ遺跡では平安時代中期を中心に多くの土器が出土しているが、その中には緑釉陶器や輸入陶磁器、陶硯などが出土していることから、当該期において官衙的な施設があったと考えられている。

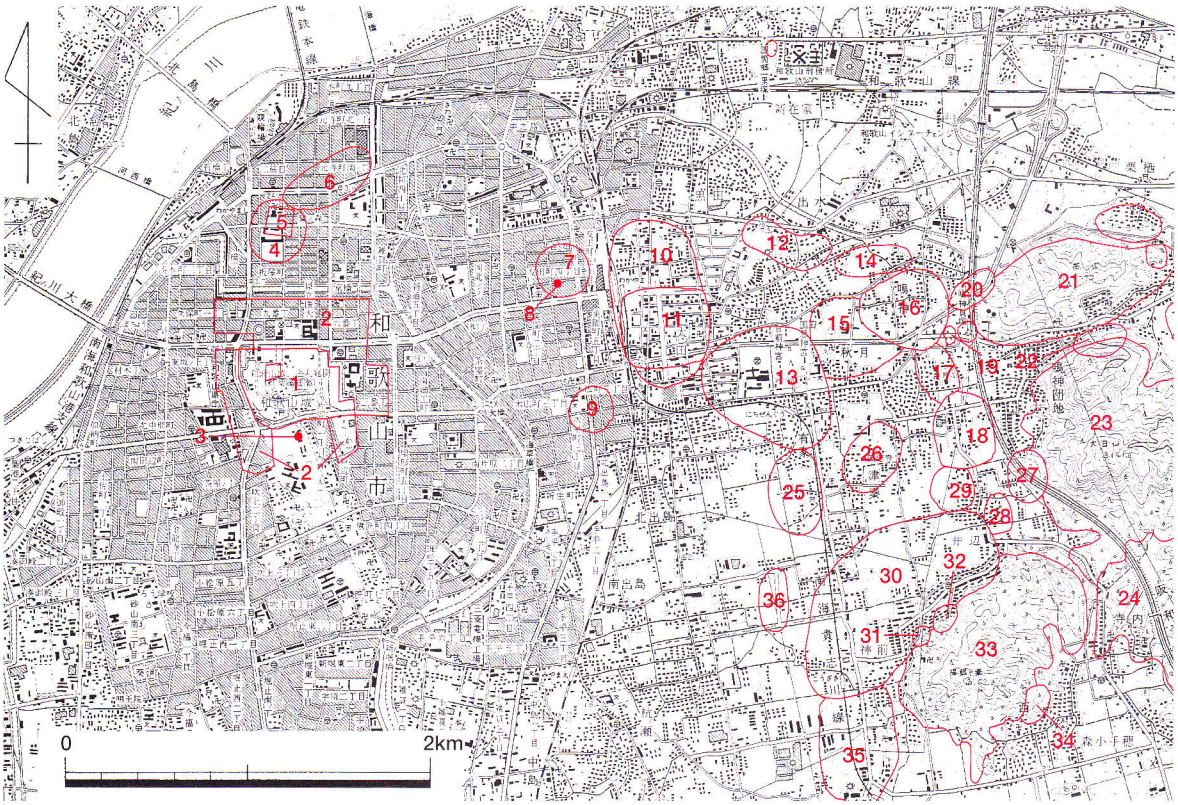
鎌倉から室町時代にかけては、太田城跡（11）とも重なる太田・黒田遺跡において多くの遺物が出土している。太田城は羽柴秀吉による水攻めで知られるが、その正確な位置や規模は不明である。しかし近年の発掘調査では中世の大溝が検出されており、これが太田城に関連する遺構とみられている。水攻めの際には大規模な堤防を築き宮井・小倉井の用水を引き入れたといわれるが、この堤防が太田城水攻め堤跡（12）として現在でも出水の地に残されている。なお戦国期には紀ノ川下流域の土豪は雑賀衆と呼ばれる集団をつくり、本願寺の門徒組織を利用して在地支配を続け、本願寺とともに織田信長・羽柴秀吉に敵対するが、その雑賀衆の土橋氏が「土橋構」を構えた地が岡山であったと考えられ、これに関連するとみられる「天正七年三月廿五日」銘の瓦製さげ振りが、天守閣再建工事の際に出土している。また調査において室町時代の瓦や石仏等が出土していることから、一時期には寺院であった場所を当該期には城郭として利用したことが推定されている。

天正13年４月に太田城を攻め落とし、紀州を平定した秀吉は、異父弟である秀長に領有させて和歌山城の築城を命じる。しかし、秀長は同年６月の四国攻めの後、大和郡山城に在城し和歌山城に戻ることはなかったため、翌年、城代として家臣の桑山重晴が３万石で入城した。『紀伊続風土記』によると、天正13年の内には本丸、二の丸（徳川期の天守台、本丸御殿）の普請が完成していたとされるが、詳細は不明である。なお結晶片岩を用いた野面積みの石垣は、その本丸、二の丸の周辺でみられることから創建期のものと考えられており、石垣改修に伴う調査（第13・17・18・20次）

では、整形した岩盤の上に直接基底石を据えていることが明らかになっている。浅野期にもこの城内の普請・作事は継続して行われたが、その石垣石材には創建期とは異なり砂岩を用いたとされる。徳川期に入って２年後の元和７（1621)年、頼宣は将軍秀忠から銀2000貫を与えられ、城郭・城下町の拡張、整備に着手したとされる。その改修は二の丸西部、砂の丸、南の丸の拡張や高石垣の構築を行う大規模なものであったといわれるが、この時期の石垣にも砂岩が用いられたようである。また、５代藩主の徳川吉宗の時代には花崗斑岩の石垣が構築されたといわれている。このように和歌山城の石垣は時期によって異なる石材を用いていたと考えられている。

周辺の江戸時代の遺跡としては、和歌山城跡（２）や鷺ノ森遺跡（４)、秋月遺跡において遺構・遺物が確認されている。特に「鍛冶屋町」の調査を行った鷺ノ森遺跡では、鍛冶炉や道路・下水道遺構、井戸、蔵、トイレなどを検出するとともに多彩な遺物が数多く出土しており、町屋の様子の一端を知ることができる。

【参考文献】
『和歌山市史』第１巻　和歌山市　　1991年
『和歌山市史』第２巻　和歌山市　　1991年
三尾功『近世都市和歌山の研究』　　1994年
『史跡和歌山城第19次発掘調査概報』　㈶和歌山市文化体育振興事業団　1999年



番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代	番号	遺跡名	時代
1	史跡和歌山城	近世	10	太田・黒田遺跡	弥生～近世	19	鳴神貝塚	縄文～弥生	28	井辺Ⅰ遺跡	弥生～古墳
2	和歌山城跡	近世	11	太田城跡	安土・桃山	20	音浦遺跡	古墳	29	井辺Ⅱ遺跡	弥生～古墳
3	岡山の時鐘堂	近世	12	太田城水攻め堤跡	戦国～江戸	21	花山古墳群	古墳	30	井辺遺跡	弥生
4	鷺ノ森遺跡	弥生～近世	13	秋月遺跡	弥生～近世	22	岩橋Ⅲ遺跡		31	井辺Ⅲ遺跡	縄文
5	本願寺跡	中世～近世	14	鳴神Ⅵ遺跡	弥生～近世	23	岩橋千塚古墳群	古墳	32	岡崎縄文遺跡	縄文
6	山吹丁遺跡		15	鳴神Ⅴ遺跡	弥生～平安	24	寺内古墳群	古墳	33	井辺前山古墳群	古墳
7	友田町遺跡	弥生～平安	16	鳴神Ⅳ遺跡	弥生～近世	25	津秦遺跡	弥生	34	森小手穂遺跡	古墳～中世
8	吉田窯跡	奈良	17	鳴神Ⅲ遺跡		26	津秦Ⅱ遺跡	弥生～奈良	35	神前遺跡	弥生
9	木広町遺跡	弥生	18	鳴神Ⅱ遺跡	弥生～平安	27	大日山Ⅰ遺跡	古墳～奈良	36	神前Ⅱ遺跡	古墳～室町

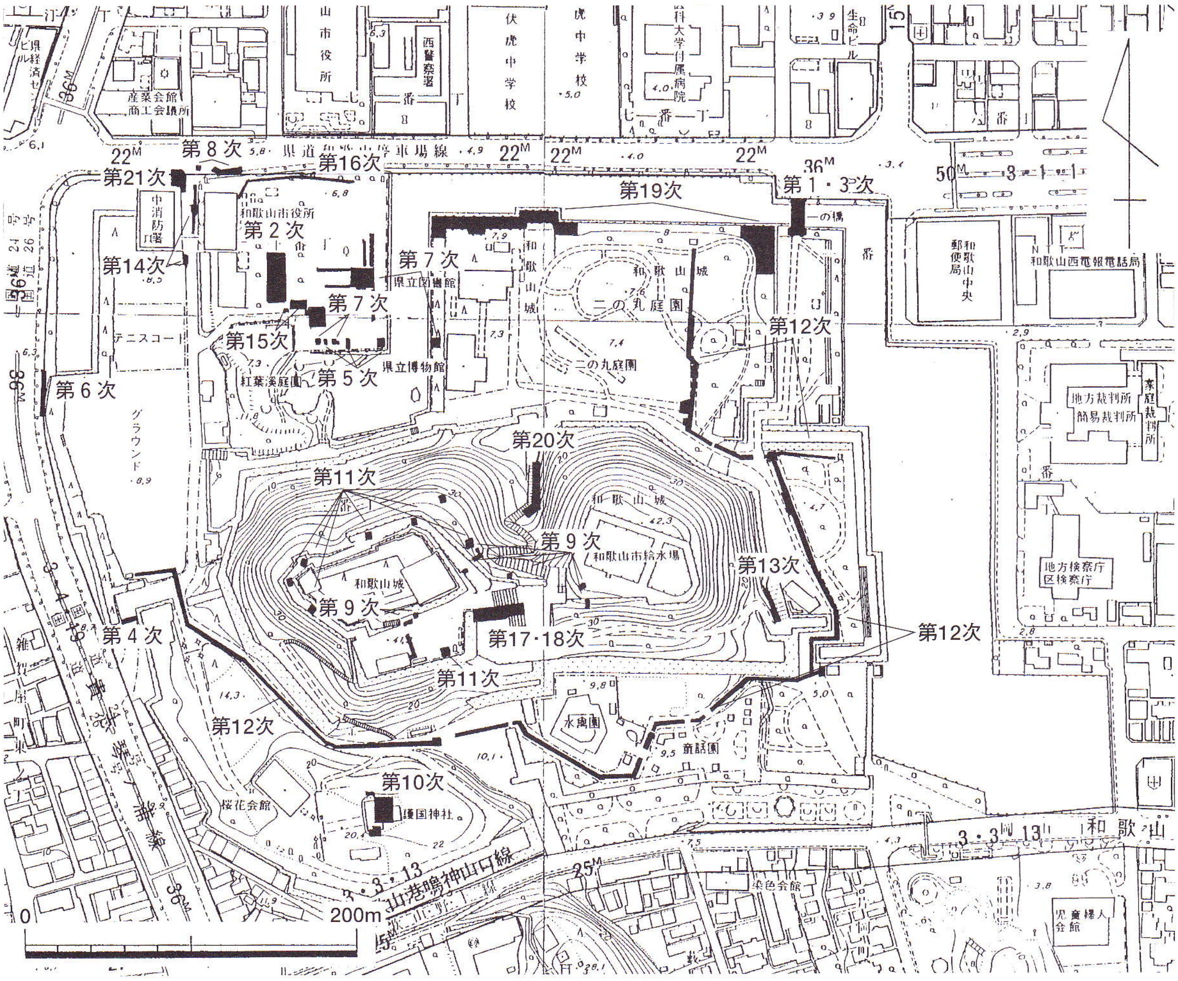
第２図　史跡和歌山城周辺の遺跡分布図

3．既往の調査

和歌山城の調査はこれまでに21回を数える。それぞれの調査位置は第３図に、調査の内容は第１表に示したが、ここでは主として橋脚及び石垣に関する調査の概要を説明する。

橋脚関係の調査については第３・５・７次調査があげられる。第３次調査は一の橋門北側の堀に架構された橋脚跡の調査であり、現橋脚部の南北両側で柱列痕と柱抜き跡が検出され、橋の架換が２度行われていたことが確認された。第５次調査は二の丸跡と西の丸跡との間に架けられていた御橋廊下の西の丸跡側の取り付き部分の調査であったが、橋に伴うとみられる遺構は検出できなかった。第７次調査は西の丸東部・御橋廊下の二の丸側取り付き部分の調査であった。御橋廊下の二の丸側取り付き部分では石垣上面に御橋廊下に関わると考えられる溝状の彫り込みが検出された。

次に、石垣に関する調査について、構造等を確認することのできた第９・13・17・18・19・20次調査の概略を説明する。第９次調査では本丸と裏坂、天守閣東側の石垣基底部の構造を明らかにした。第13次調査は坂道登り口の石垣基底部及び坂道の造成状況等を確認し、第17・18次調査では、天守一の門櫓台石垣の構築状況や周辺坂道の造成状況などを確認した。第19次調査は二の丸櫓台石垣の構造の一部や櫓台上で礎石・塼敷等を確認し、２時期の遺構面を検出した。特に、下層の焼土層と火を受けたとみられる石垣面・礎石から古い段階の遺構が焼失した可能性の高いこと、それらが二の丸北辺部櫓台全域に存在することなどを明らかにすることができた。第20次調査では裏坂登



第３図　第1～21次調査位置図

り口の石垣の構造を確認した。

なお、第13・17・18・20次調査を行った石垣は主として結晶片岩石材を用いたものであり、第19次調査の石垣は主として砂岩石材を用いたものであった。

第１表　調査一覧表

次数	期　間	面積（㎡）	概　要	原　因	調査主体	文献
1	1981年10月～11月	72	大手門に関する２時期の遺構面を確認。大手門の礎石を検出。	一の橋大手門再建工事	和歌山市教育委員会	3
2	1982年1月～3月	350	西の丸西側で２時期の遺構面を確認。建物の基礎石組、石組溝、土坑等を検出。	旧市庁舎跡地整備工事。現地説明会開催。	和歌山市教育委員会	3
3	1982年11月	40	一の橋が過去に２度の架換が行われていることを確認。	一の橋架換工事	和歌山市教育委員会	3
4	1984年2月～3月	60	追廻門礎石の確認調査。石組暗渠排水溝等を検出。	追廻門解体修理	和歌山市教育委員会	3
5	1985年8月～10月	72	西の丸側廊下橋取付部分で石垣裏込を確認。内部に焼成痕のある円形土坑を検出。	西の丸側廊下橋取付部分確認調査	和歌山市教育委員会	3
6	1986年12月～1987年3月	55	砂の丸から西に突出する石垣基底部を検出。	城北西部の地下ケーブル埋設工事	和歌山市教育委員会	3
7	1987年1月～3月	480	西の丸東部で雨落溝・半地下通路・石組等を検出。	西の丸東部・二の丸側廊下橋取付部分確認調査	和歌山市教育委員会	3
8	1988年1月～4月	60	城北西部の埋められた堀にかかわる石垣を検出。	城北西部のキャブシステム埋設工事	和歌山市教育委員会	3
9	1988年10月～11月	47	天守閣と本丸周辺のグリッド及びトレンチ調査で石垣裾部を３ヶ所検出。	天守閣と本丸周辺の電柱移設とケーブル埋設工事	和歌山市文化体育振興事業団	1
10	1990年7月～8月	358	砂の丸南側の調査。江戸時代に遡る遺構は検出されなかった。	宗教法人和歌山護国神社社殿等の再建工事	和歌山市文化体育振興事業団	2
11	1990年12月～1991年1月	74	天守閣周辺でのトレンチ調査の結果、建物基壇、石組溝等を検出。	天守閣周辺の夜間照明設備改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	2
12	1993年5月～10月	967	二の丸から表坂東側、中御門跡から砂の丸までトレンチ調査。石垣、石組溝、土坑等を検出。	城内における公衆トイレの水洗化に伴う工事	和歌山市文化体育振興事業団	3・4
13	1995年1月～3月	100	表坂登り口付近の結晶片岩石垣基底部及び坂道の造成状況等を確認。	表坂入口付近の石垣改修工事	和歌山市文化体育振興事業団	5・7
14	1995年7月	30	勘定門に関する礎石、西外堀に関する石垣等を確認。	城北西部のキャブシステム埋設工事	和歌山市文化体育振興事業団	6
15	1996年5月～7月	80	西の丸跡南側の調査。３面の遺構面を確認し、石組暗渠溝等を検出。	西の丸跡内における便所棟建設工事	和歌山市文化体育振興事業団	9
16	1996年9月	40	西の丸北端部で石垣、石積み、石列等を検出。	防災無線ケーブル設置工事	和歌山市教育委員会	9
17	1996年11月～1997年3月	180	天守一の門櫓台結晶片岩石垣の構築状況、周辺坂道の造成状況などを確認。	天守一の門櫓台の南面石垣改修	和歌山市文化体育振興事業団	7・9
18	1998年1月～3月	60	天守一の門櫓台結晶片岩石垣の裏込構造を確認した。	〃	和歌山市文化体育振興事業団	7・9
19	1998年7月～12月	1000	二の丸北縁部櫓台上で礎石、塼敷等を検出。二の丸櫓台石垣の構造等を確認。	二の丸跡整備事業	和歌山市文化体育振興事業団	8
20	1998年11月～1999年1月	110	裏坂登り口の結晶片岩石垣の構造等を確認。	裏坂下東石垣改修	和歌山市文化体育振興事業団	7
21	1999年9月～10月	20	西外堀に関する石垣を検出。	歩道拡張工事	和歌山市教育委員会	

【参考文献】

1『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』１（財）和歌山市文化体育振興事業団　1992年

2『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』２（財）和歌山市文化体育振興事業団　1994年

3『史跡和歌山城 第12次発掘調査概要報告書』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1994年

4『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』３（財）和歌山市文化体育振興事業団　1996年

5『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』４（財）和歌山市文化体育振興事業団　1997年

6『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』５（財）和歌山市文化体育振興事業団　1998年

7『史跡和歌山城 石垣保存修理報告書』和歌山市産業部・和歌山城管理事務所　1999年

8『史跡和歌山城 第19次発掘調査概報』（財）和歌山市文化体育振興事業団　1999年

9『和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報』６（財）和歌山市文化体育振興事業団　2000年

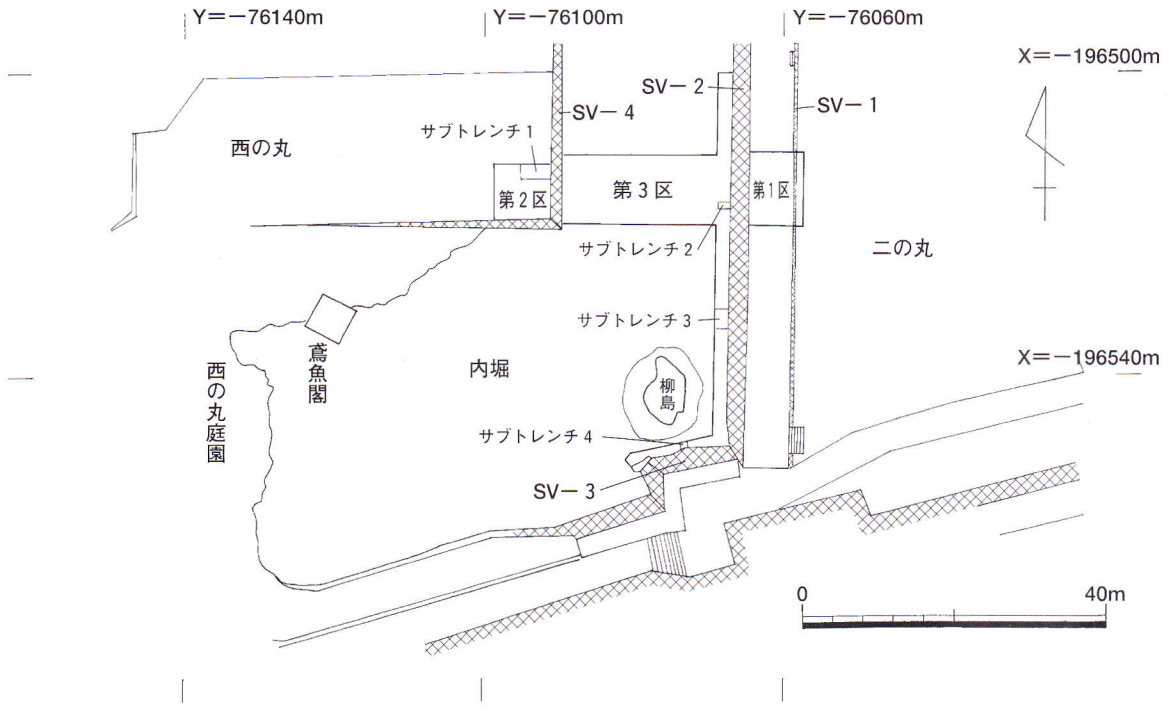
4．調査の方法と経過

（1）調査の方法

調査区は御橋廊下の推定箇所及びその取り付き部分に設定し、二の丸側石垣上部及び東面石垣裾部を第１区、西の丸側石垣上部を第２区、堀内部を第３区とした。このうち調査区の範囲は、第１区が一辺約10m、第２区が東西約７m、南北約7.5mであり、第３区については橋脚基礎検出範囲（東西23m、南北10m）の他、石垣裾部に幅約２m、長さ約60mのＬ字状の調査区を設定した。以上の合計調査面積は約500㎡である（第４図）。また、周辺の石垣も調査対象とした。

調査は、すべての掘削を人力によって行った。第３区は浚渫工事の後に調査を開始したが、堀中央部は湧水により平面的な掘削が困難であったため、橋脚基礎の輪郭を確認するにとどめた。調査にあたってまず全調査区のほぼ中央部分を通る断面ライン（A-A'）を設定し、第１・２区の遺物の取り上げに関してはこのラインを基準に第１区は６分割、第２区は４分割して行った。第３区については石垣裾部のトレンチ部分は10m単位、橋脚基礎周辺はそれぞれに付した番号により取り上げた。また深堀調査として第２区北壁に１ヶ所、第３区石垣裾部に３ヶ所のサブトレンチを設定して石垣の裏込状況及び基底部構築状況の確認を行うとともに、第３区のサブトレンチについては石垣断面ライン（B-B'、C-C'、D-D'）を設定し、合わせて記録に努めた。

記録保存の方法としては、遺構平面図は国土座標軸を基準としてラジコンヘリによる航空写真測量を実施し、一部手実測を行った。また第１区東面石垣（SV-１）の立面図は写真測量により作成し、土層断面図、石垣断面図については手実測により作成した。以上の図面はすべて1/20の縮尺である。その他、調査地周辺図の作成には遺跡調査汎用システムカタタを用いた。なお遺跡の水準は国家水準点（T.P.値）を基準とし、土層の色調及び土質の観察については農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』を用いた。



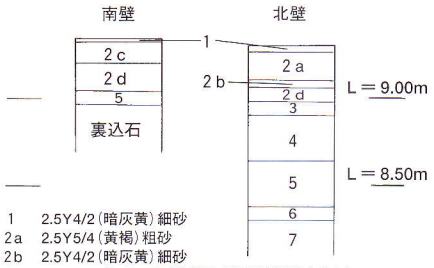
第４図　調査地区割図

（２）調査の概要

各調査区の基本層序は第５～７図に示した通りである。まず第１区の基本的な土層の堆積状況としては、現地表（第１層）の下に近・現代の整地土（第２a～d層）が約25cm堆積している（第５図）。これらの土層は場所により土質が異なるが調査区全面に堆積している。その下の第３層上面において礎石や基礎石組等を検出した。またこれらの遺構を残し下層を掘削した結果、調査区北端部の第５・７層上面において礎石を検出した。第３・４層及び第６・７層は北側にのみ堆積する整地土で第６層以下にはほとんど遺物がみられない。第７層は黄褐色の砂層であるが、上面において赤変部分・焼土が確認できることから火災が起こったことが推定できる。調査区南側では遺構は確認できず、第５層下面において石垣の裏込石を検出した。また調査地北東部が周囲と比べて落ち込んでいる状況を確認できた。

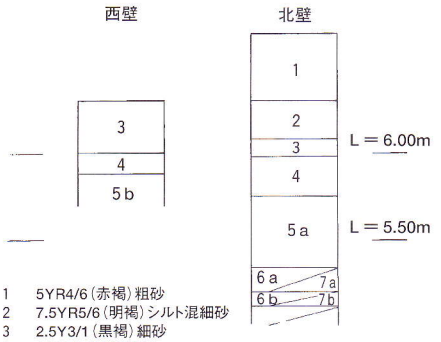
次に第２区の土層堆積状況は、第１～４層が合計約90cmの厚さで堆積しており、出土遺物からすべて近・現代の整地土と考えられる（第６図）。第５a・b層は土質により細分されるもので、この上面が第５次調査時に検出された遺構面である。また北壁においてサブトレンチ１を設定し掘削を行った結果、西の丸を構成する盛土（第６a・b層）の他に、石垣の裏込石とそれを覆う明褐色のシルト（第７a・b層）を検出し、さらに断面観察を行った結果、それらが版築状に堆積している状況を確認した。第６a・b層、第７a・b層の土質はそれぞれ同一である。裏込石には結晶片岩の割石が用いられている。

第３区、堀内東端部分の堆積状況としては、第１層が浚渫により除去されたため正確な厚さは不明であるが、少なくとも50cm以上の堆積であったとみられる。第２a層は礎石周辺にのみ確認されるもので、この上面に橋脚遺構が構築されている。第２b層は堀底にあたる土層で、瓦が大量に出土した。またSV-２、SV-３の構築状況を確認するために、サブトレンチ２～４を設定して掘削を行った結果、第２a層は約５cm、第２b層は５～10cm、第３層は約５cm、第４a層は約20cm、第４b層は１m以上の厚みをもつことが確認できた（第７図）。第４a・b層は石垣の根固めとみられる礫層（捨石層）で、その石材には砂岩の円礫の他、砂岩割石や結晶片岩も含まれる。詰められた礫の大きさにより第４a層、第４b層に細分できる。第５層はサブトレンチ４でのみ確認した灰色の粗砂で、自然堆積層とみられる。



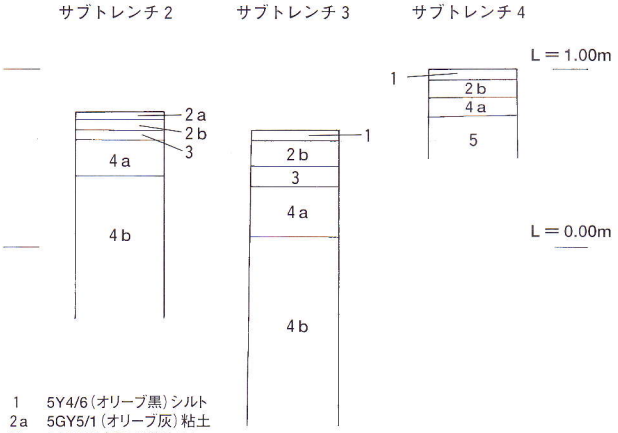
1　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂
2a　2.5Y5/4（黄褐）粗砂
2b　2.5Y4/2（暗灰黄）細砂
2c　10YR4/3（にぶい黄褐）粗砂（結晶片岩片を含む）
2d　7.5YR4/4（褐）粗砂混シルト（1cm程度の円礫を含む）
3　10YR5/4（にぶい黄褐）シルト
4　10YR4/4（褐）細砂混シルト（2～3cmの円礫を多く含む）
5　10YR4/4（明黄褐）シルト（結晶片岩片を多く含む）
6　10YR4/3（にぶい黄褐）細砂
7　10YR5/4（にぶい黄褐）細砂（焼土を多く含む）

第５図　第１区土層柱状模式図



1　5YR4/6（赤褐）粗砂
2　7.5YR5/6（明褐）シルト混細砂
3　2.5Y3/1（黒褐）細砂
4　10YR4/4（褐）細砂
5a　2.5YR5/3（黄褐）細砂（2～5cmの円礫を含む）
5b　2.5YR4/4（オリーブ褐）粗砂
6a　2.5YR5/4（黄褐）細砂（2～5cmの円礫を含む）
6b　2.5YR5/4（黄褐）細砂（2～5cmの円礫を含む）
7a　7.5YR6/8（橙）シルト（結晶片岩片を含む）
7b　7.5YR6/8（橙）シルト（結晶片岩片を含む）

第６図　第２区土層柱状模式図



1　5Y4/6（オリーブ黒）シルト
2a　5GY5/1（オリーブ灰）粘土
2b　2.5Y4/2（暗灰黄）シルト
3　10GY4/1（緑灰）粗砂
4a　7.5YR5/1（灰）粗砂（15～20cmの砂岩円礫・割石、結晶片岩を含む）
4b　N5/0（灰）粗砂（20～30cmの砂岩円礫・割石、結晶片岩を含む）
5　N5/0（灰）粗砂

第７図　第３区土層柱状模式図

5．遺構

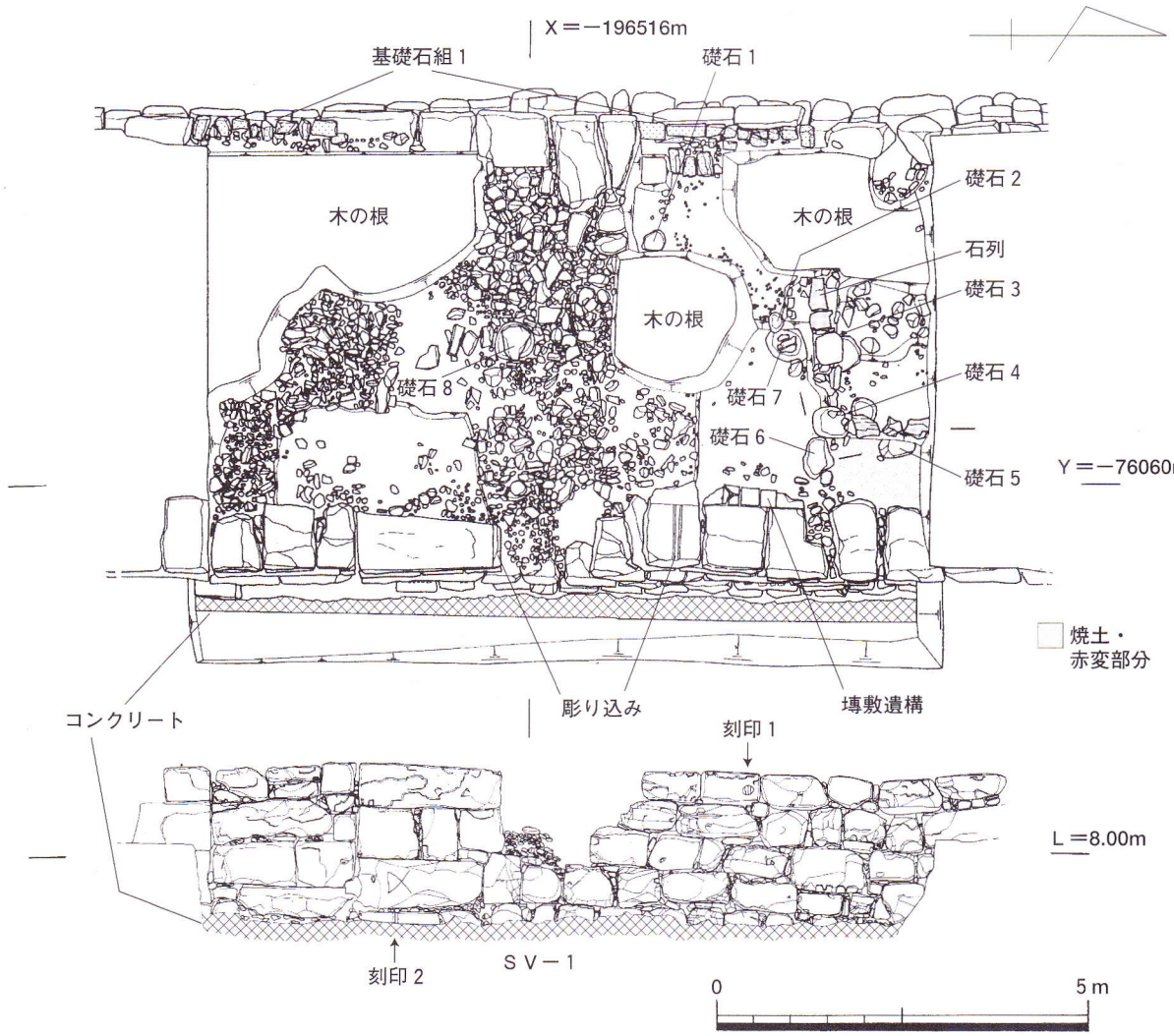
主要な遺構としては、第３区で検出した橋脚遺構の他、第１・２区で検出した多聞櫓、基礎石組等がある。以下、調査区ごとに説明する。

（１）第１区（第８・９図、図版１～３）

調査区は二の丸西側の石垣上面及び裾部である。遺構は多門櫓に関する礎石、石列や御橋廊下に関する礎石、その他基礎石組、塼敷遺構を検出した。

［多門櫓］　調査地北側の多門櫓に相当する地点において、第３層上面で石列を、第５層上面で礎石３・４、第７層上面で礎石５～８をそれぞれ検出した。その構築面から３時期に区分できる。礎石５～８は楕円形の砂岩を用いたもので、長径50㎝程度のものである。その内礎石４・５は赤変しており、周辺には焼土がみられることから、上部の建物が火災にあったものと考えられる。第５層上面の礎石３・４、第３層上面の石列は同一ラインで据えられており、石列を据える際に礎石をそのまま踏襲して基礎を構築した可能性も考えられる。第３層の石列の東西幅は復元すると４ｍとなる。

［御橋廊下・庇柱礎石］　第３層上面において礎石１を検出した。直径30㎝のもので、石材は花崗岩である。出土位置と絵図の検討から、『二の丸御橋廊下桁行弐拾歩一建地割』にみる東側庇柱の北側礎石に相当するとみられる。同一面では他にも礎石２を検出しているが、絵図と合致するものは礎



第８図　第１区遺構平面図・石垣立面図

X＝−196500m

X＝−196520m

X＝−196540m

A´

SV−1

第1区

多聞櫓

B´

C´

SV−2

B

C

サブトレンチ2

基礎C3

サブトレンチ3

サブトレンチ4

D´

D

SV−3

第3区

橋脚遺構

SV−4

基礎石組3

サブトレンチ1

第2区

SK−1

SK−2

A

瓦集中出土範囲

0

10m

A´

L＝9.00m

L＝5.00m

L＝1.00m

Y＝−76060m

裏込石

Y＝−76080m

結晶片岩

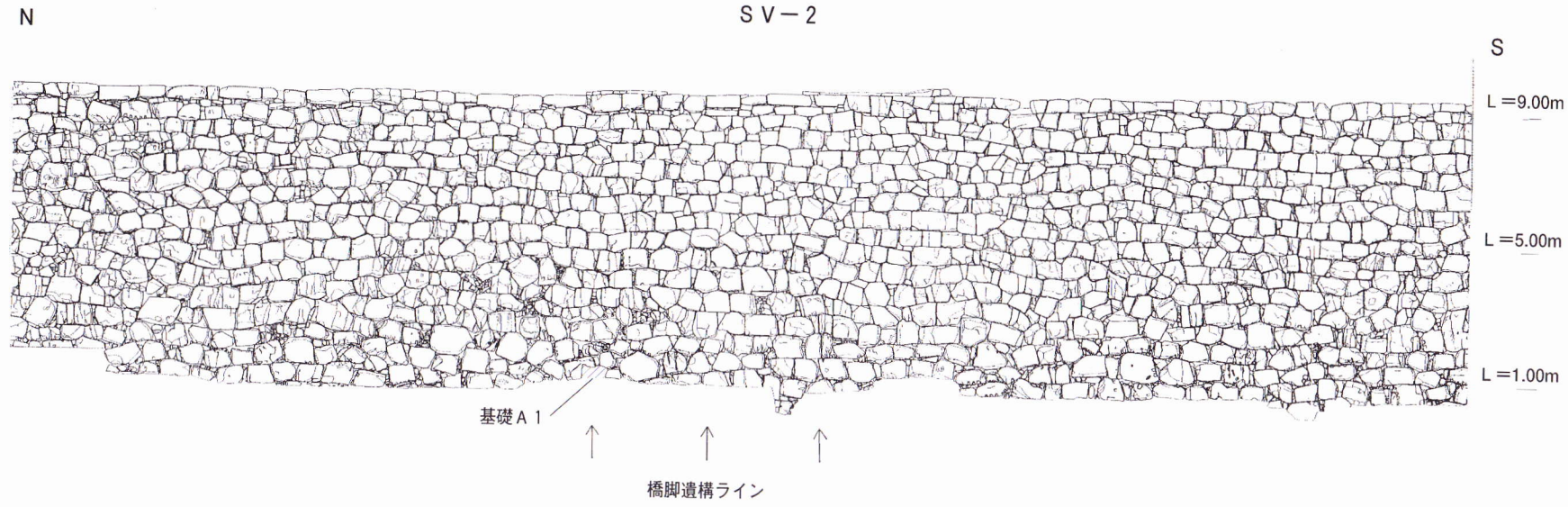
砂岩

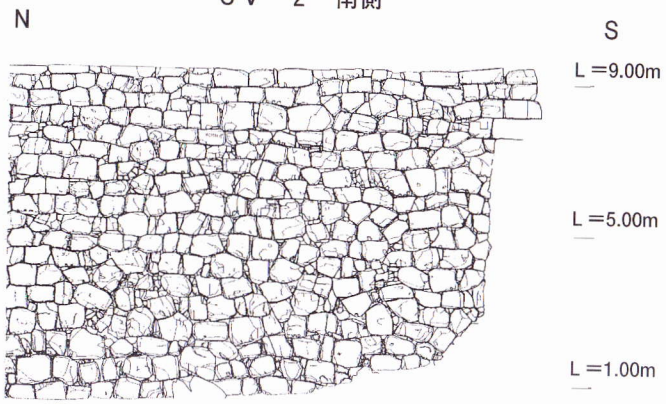
裏込石

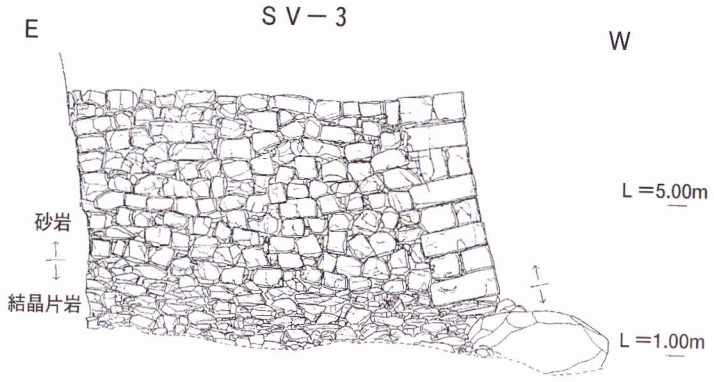
Y＝−76100m

A

第9図　遺構全体平面図・断面図







第10図　SV-2・3石垣立面図

石１のみである。

［基礎石組１］　SV－２の天端において検出した石組遺構である。結晶片岩１段分で構成されており、幅は約70㎝を測る。橋の取り付き部分には基礎石組が存在しない。周辺からは漆喰片も出土していることから、土塀の基礎とみられる。

［塼敷遺構］（図版２）　SV－１北側上面において、第２層掘削後に検出した。石垣最上段のうち、３つの石材の石尻は断面Ｌ字状に加工されており、塼はその上に敷かれていた。原位置を保って出土した瓦塼は３枚のみである。第２層からも瓦塼の破片が多く出土したことから考えて、周辺では塼敷による床面整備がなされていたとみられる。瓦塼の大きさは一辺23㎝、厚さ３㎝を測る。

［SV－１］　南北長約100ｍを測る石垣で、石材には砂岩を用いており、打ち込みハギの布目積みで構築されている。調査範囲内で観察したところ、第７次調査時に検出された幅５㎝の溝状の凹みと共に、刻印を２ヶ所確認した（図版３）。また石垣の南半部分は、積み直しが行われているとみられ、特に南端部は本来開口部であった場所を石材で閉塞しているような状況が確認できる。SV－１裾部については、基底部前面がコンクリートによって補強されていたため、構築状況を把握することはできなかった。確認できたSV－１の高さは約２ｍである。

（２）第２区（第９図、図版４・５）

調査区は西の丸の南東隅部分である。遺構は第５次調査時にも確認された土坑と基礎石組であり、第５層上面において検出している。その他、SV－４の構築時期を確認することができた。

［SK－１・２］　第２区西側で検出した近代の焼土坑である。それぞれ直径約１ｍ、深さ40㎝を測る。

［基礎石組２］　石垣上面端部にみられるもので、幅約60㎝の規模で築かれている。南面は結晶片岩を１段分、東面は柱状に加工した砂岩を２段分積んでいる状況を確認した。

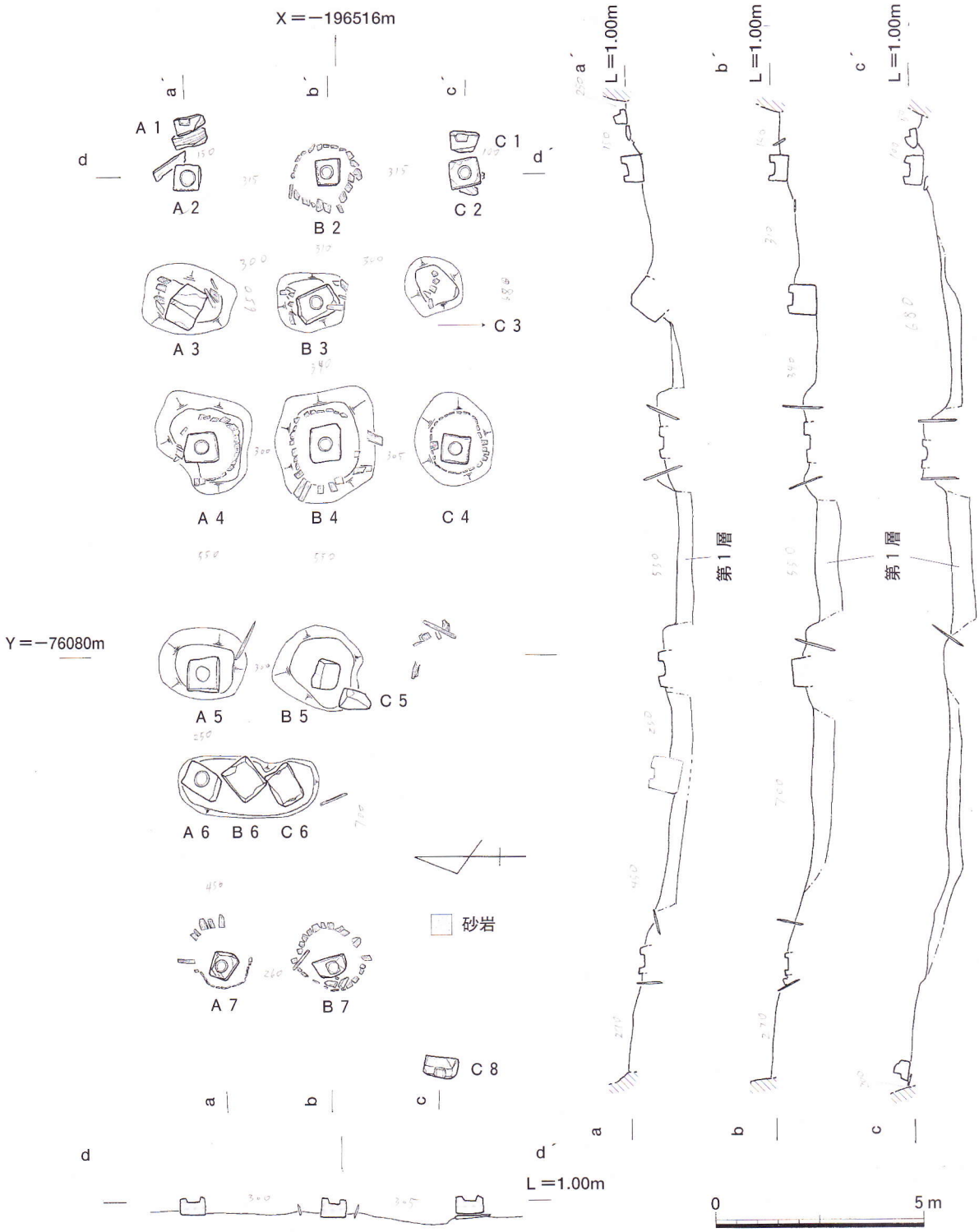
［SV－４］　南北長110ｍ、堀底からの高さ5.5ｍで74度の勾配を測る石垣である。堀底から３段目までは砂岩、それより上は結晶片岩の割石を用いて構築されていることから、大規模な積み直しが行われたものとみられる。サブトレンチ１において掘削を行ったところ、裏込石や版築状の盛土を検出すると共に、17世紀後半から18世紀前半の土器・陶磁器を確認することができた（図版５）。このことからSV－４は18世紀代には積み直しが行われたものと考えられる。

（３）第３区（第９～12図、図版６～12）

調査区は堀底の御橋廊下推定部分とSV－２・３の裾部である。遺構としては、浚渫工事の際に確認された橋脚遺構がある。その他、SV－２・３の基底部構築状況について知見を得ることができた。

［橋脚遺構］（第９・11図）　検出した礎石は20基で、その内本来の構造を残すものは６基である。その出土状況から橋脚の配置は３本１組、８列となり合計24本と復原できる。調査では橋脚基礎の東西列をA～C列とし、南北列を東から１、２と数えて橋脚基礎の番号とした。なお基礎C３の礎石については南へ約11ｍの地点で検出している。この橋脚遺構の規模は東西約23ｍを測る。また南北方向の礎石の間隔は東端で3.5ｍ、西端で2.5ｍを測り、西の丸側の間隔が狭くなっているが、これは石垣の高低差によるもので、橋脚の長さの違いを基底部の幅で調整したものとみられる。

橋脚の基礎は杉の板材を直径約1.4ｍの円形に組み、その中に礎石を据えて粘土、砂礫で内外を補強する構造である。板材は使用部位にもよるが、多くのものは長さ90㎝、幅10～20㎝、厚さ2.5㎝の大きさを測り、下端部は内側の面を斜めに削り断面三角形に仕上げている（第23図、図版18）。この板材を25枚前後組み合わせ、中央部を竹のタガで固定していることが確認できた（図版10）。礎石は



礎石規模集計表

礎石	幅(南北)	幅(東西)	高さ	ほぞ穴径	ほぞ穴深さ	礎石	幅(南北)	幅(東西)	高さ	ほぞ穴径	ほぞ穴深さ	礎石	幅(南北)	幅(東西)	高さ	ほぞ穴径	ほぞ穴深さ
A1	70	40	30	方27×13	18	B1						C1	70	45	30	方28×17	15
A2	60	60	45	32	11	B2	60	60	45	33	13	C2	62	60	45	32	13
A3	70	70	60	32	13	B3	65	80	60	32	10	C3	48	72	50	32	10
A4	80	70		31	10	B4	75	90		33	10	C4	70	65		32	10
A5	80	60		35	10	B5	80	60	70	33	11	C5	70	60	50		
A6	60	70	60	30	10	B6	50	80	70	30	10	C6	55	70	60	31	10
A7	60	60		33	10	B7	70	50		33	10	C7					
A8						B8						C8	80	45	30	方27×15	15

（単位：cm）

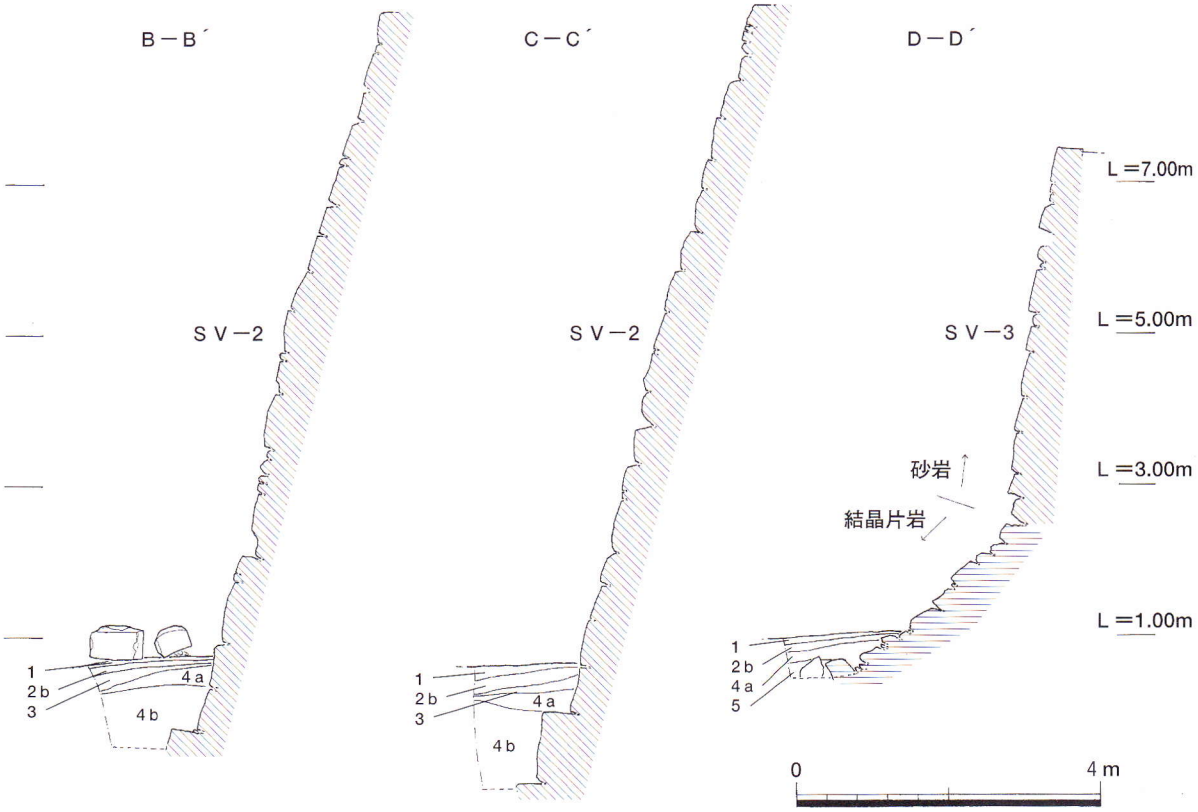
第11図　橋脚遺構平面図及び断面図

基本的に長方体で上面に円形のほぞ穴をもつ構造で、側面角部中央付近にはえぐりがみられる。法量は第11図下に示したとおりであるが、中央部分の礎石は石垣裾部のものに比べて体積が２倍近くあり、荷重のかかる地点にはより大きい礎石を配していたことが分かる。石材には花崗閃緑岩を用いているが、石垣裾部に置かれた基礎A1・C1・C8については不定形な砂岩を用い、ほぞ穴は方形の穴を半載したような形状を呈している。花崗閃緑岩の礎石にみられた矢穴の幅は約６㎝であった。

関連遺物としては、サブトレンチ２の掘削の際に第２層から出土した寛永通寶が挙げられる（第18図、図版16）。合計12枚出土しており、その枚数や出土位置から地鎮等の儀礼に用いられたと考えられる。また礎石のほぞ穴の中からは鉄製楔が、礎石周辺からは鉄製鎹や銅板等が出土した。

［SV－２］　南北長110m、堀底からの高さ9.5mを測る砂岩打ち込みハギの布目積み石垣で、勾配は76度である。基底部の状況を把握するためにサブトレンチ２・３を設定、掘削を行ったところ、浚渫後の段階からさらに３段の石垣を検出し、その最下段は30㎝ほど前面に張り出していることが明らかになった（第12図B-B'、C-C'断面）。これが基底石に相当するとみられるが、崩落の危険性が高いため基底石の下面を掘削することができず、基底部において胴木の有無を確認するまでには至らなかった。捨石は石垣３段目の半ばまで堆積しており、1.3m以上の厚みをもつことを確認した。

［SV－３］　東西長12mで全高７mを測る石垣で、SV－２とは約100度の角度で組み合っている。観察の結果、６～８段目より下部は結晶片岩を用いた自然石の野面積み、上部は砂岩を用いた打ち込みハギの布目積みによって構築されており、積み直しが行われていることを再認識することができた（第10・12図D-D'断面）。SV－３下部は隅角部の切り合いからSV－２構築以前に既に存在したものとみられ、使用石材や構築方法から和歌山城創建期に築かれたものと考えられる。下部の勾配は47度、上部の勾配は83度を測る。サブトレンチ４において基底部を掘削した結果、粗砂層（第５層）の上に結晶片岩の割石を置き、その上に基底石を据える形で構築されている状況を確認した。



第12図　石垣断面図

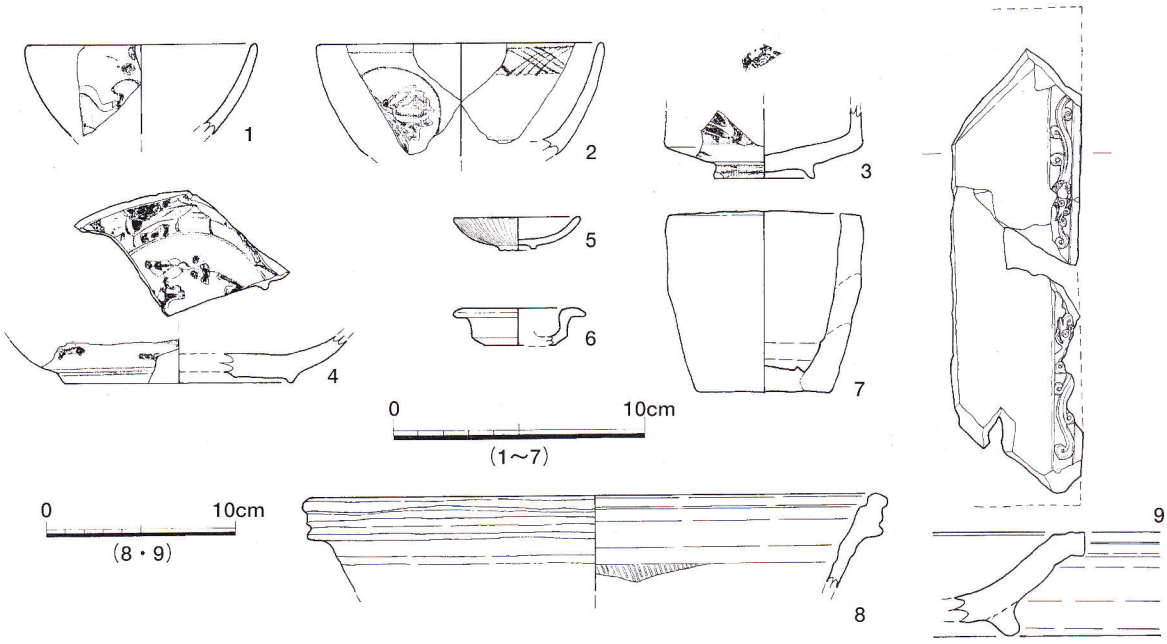
6．遺物

出土した遺物は江戸時代のものが大半であり、土師器、国産陶磁器、瓦、土製品、金属製品、木製品、縄、壁土等がある。第１区では瓦塼が多く出土した他、肥前・瀬戸美濃・産地不明の陶磁器などがみられる。第２区では肥前系陶磁器を中心とした遺物が石垣裏込内から出土した。第３区では石垣裾部から軒丸瓦、軒平瓦等が多量に出土し、貝類や松の種子などの自然遺物もみられた。また橋脚遺構周辺からは鉄製の釘・鎹、銅板等、橋に関わる金具や、板材、込栓等の木製部材が出土している。基礎A５周辺からは一部炭化した木片が出土しているが、御橋廊下との関係は不明である。以下、それぞれ種別毎に項目を立てて記述する。

（１）土器・陶磁器

［第１区出土土器・陶磁器］（第13図、図版13）

１～５は肥前系磁器である。１～４は染付で、１・２は碗である。外面の主文様は１が手描き、２はコンニャク印判による染付である。口径は１が9.2cm、２が11.4cmである。３は底径4.0cmを測る筒茶碗で、見込み部にはコンニャク印判による五弁花が押される。４は底径9.0cmを測る皿で、底部は蛇ノ目凹形高台に作られる。内面見込み部の主文様は梅文と考えられ、裏文様は唐草で、茎の表現は太いものである。５は白磁紅皿で、口径5.0cm、器高1.2cm、底径1.4cmを測る。釉は青灰味を帯びた白色を呈し、内面には貫入が多く確認できる。６は産地不明の陶器で土瓶の蓋であるが、つまみは欠損している。口径5.4cm、器高1.4cm、底径2.8cmを測り、内面には鉄釉が施され、黒褐色に発色する。体部は、削りにより調整される。７は焼塩壺である。口径7.6cm、器高7.1cm、底径5.2cmを測る。型づくりで成形され、底部は貼付け底で、内面には大きな瘤状の隆起を残す。また胎土中には、雲母を多量に含んでいる。８は産地不明の擂鉢で、口径30.2cmを測る。内面には８条１単位の擂目が認められる。９は土師質土器の盤と考えられる。型押しによって成形されたようで、その際の指押さえの痕跡が口縁部付近に残存しているが、器表面における細部調整のナデは丁寧である。高



第13図　遺物実測図１

台は隅にのみ付加されたようで、本来は４ヶ所と推定されるが、高台貼付け時のナデは粗雑である。また口縁部上端面には、辰を主文様とする笵が押捺される。

第１区出土の土器・陶磁器は、18世紀を中心とした年代が考えられる。これらの出土層位は、１・３が第４層、２・４・５・９が第２層、６が第３層、７が第2ｃ層、８が第2ｄ層である。

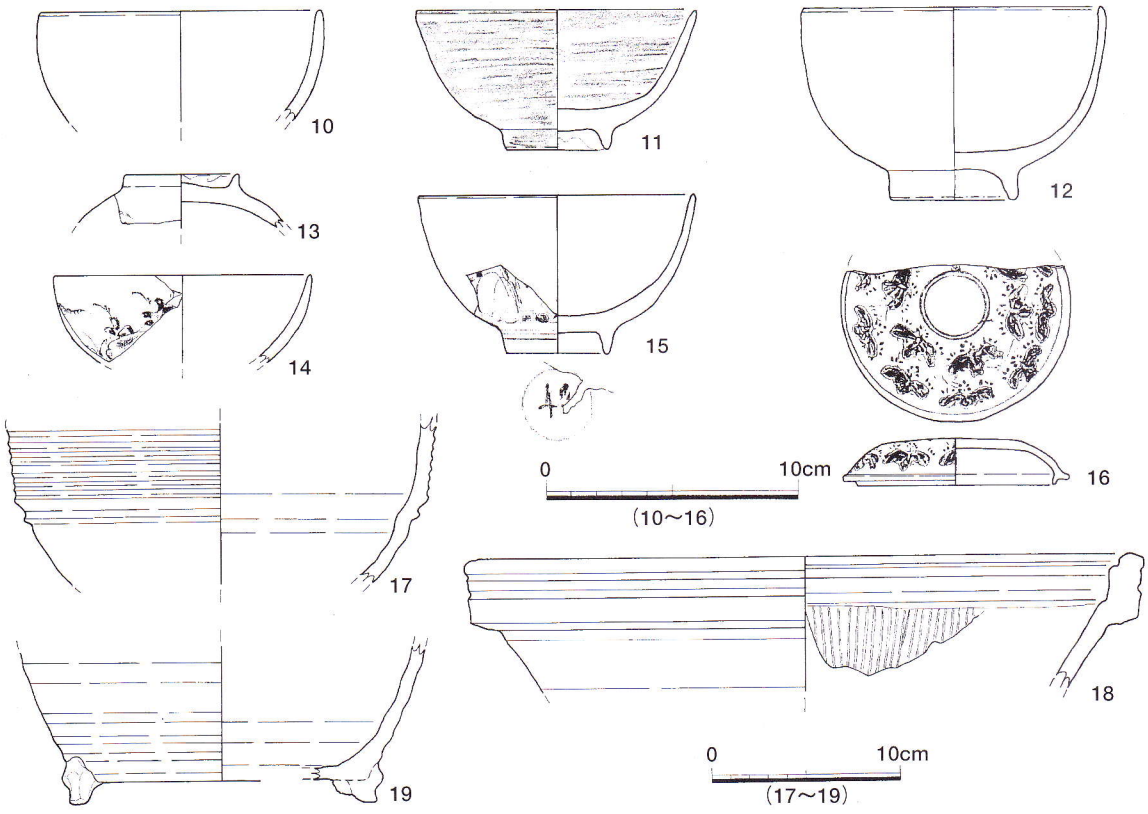
［第２区出土土器・陶磁器］（第14図、図版13・14）

10～12は肥前系陶器の碗である。10・12は高台からほぼ上方に向けて緩やかに体部がのび、そのまま口縁部にいたるものである。透明釉が施され、12には細かい貫入が認められる。11は高台から斜上方にのび、口縁部にいたる形態を呈し、口径11.0cm、器高5.6cm、底径4.0cmを測る。白色の化粧土を刷毛塗りし、刷毛目文様を描くもので、見込み部の釉は蛇ノ目釉剥ぎが施される。これらの高台畳付の釉はかき取られる。13～16は肥前系磁器の染付である。13は蓋で、つまみは低く、薄いつくりである。14・15は碗である。15は口径10.9cm、器高6.2cm、底径4.1cmを測り、高台内には「大明年製」の崩れた裏銘が見られる。16は壺又は鉢の蓋と考えられるもので、口径7.8cm、器高1.7cmを測る。つまみを持たない形態であり、主文様は桐文である。17は丹波焼の壺と考えられ、体部外面には強いナデにより凹線状に窪む。18は堺焼の擂鉢であり、口径35.8cmを測る。内面には、８条１単位の擂目が認められる。19は備前焼の脚付香炉又は鉢と考えられる。脚はナデによって形作られる。胎土中には長石を多量に含み、赤褐色に発色する。

第２区出土の土器・陶磁器は、10～14・16については、17世紀後半～18世紀前半に比定され、他は18世紀代の年代が考えられる。これらの出土層位は、10～13・16が第7ａ層、14が第7ｂ層、15が第４層、17・18が第6ａ層、19が第３層である。

［第３区出土土器・陶磁器］（第15図、図版13・14）

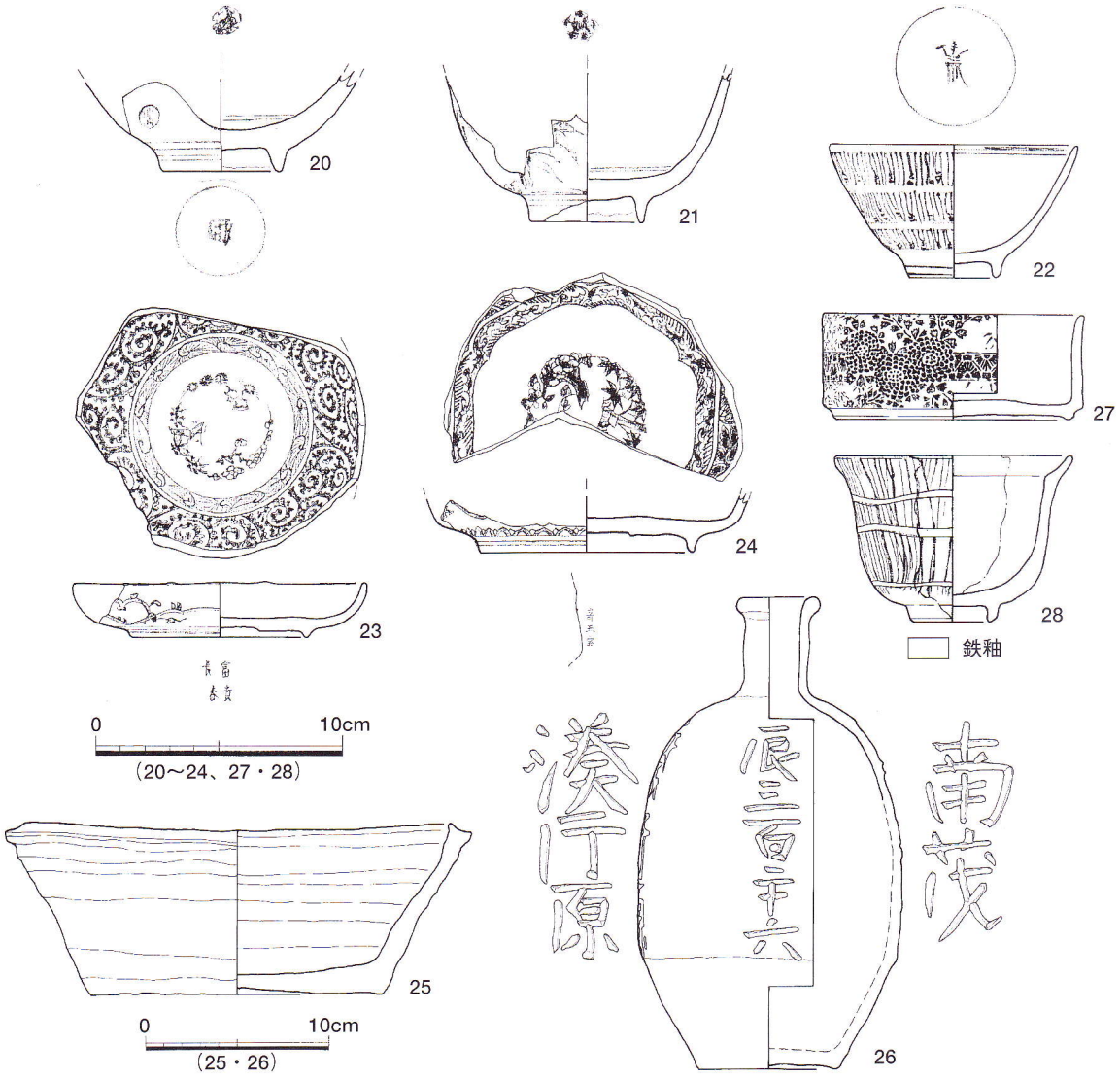
20～24は肥前系磁器の染付である。20・21は碗で、共に見込み部には二重の圏線内にコンニャク



第14図　遺物実測図２

印判による五弁花が押される。底径は20が4.8cm、21が4.6cmを測る。また20は二次焼成を受けた痕跡が確認できる。22は小広東碗で、見込み部には一重の圏線内に「朱」と考えられる銘が見られる。23・24は底部が蛇ノ目凹形高台を呈する皿で、共に見込み部の主文様に松竹梅文を環状に配する。23は口径11.8cm、器高2.2cm、底径7.2cmを測る稜花皿で、高台内には「富貴長春」の裏銘が見られる。24は底径8.6cmを測る六角皿で、裏文様は唐草文の他、蓮が見られる。また高台内の裏銘は「奇玉宝鼎之珍」である。25は備前焼の鉢で、口径25.2cm、器高9.0cm、底径8.0cmを測る。底部にはすさ状の圧痕と共に焼台の痕跡が確認できる。26は産地不明の鉄釉徳利で、口径3.6cm、器高25.5cm、底径7.7cmを測る。底部と内面体部を除く全面に釉が施され、茶褐色に発色する。施釉後、体部３ヶ所には「湊行原」「辰三百二十六」「南茂」の文字が刻まれる。27・28は他のものに比べ、年代的に新しい一群である。27は産地不明の染付磁器で、小鉢である。染付は型紙摺り技法によるものである。28は産地不明の湯飲み茶碗で、口径9.6cm、器高6.8cm、底径3.6cmを測る。鉄釉による縦線、白色化粧土による横線の装飾後、透明釉・鉄釉を二度がけするが、鉄釉は約1/2のみに意図してかけ分けされている。

第３区出土の土器・陶磁器は、18世紀中頃～後半を中心とした年代が考えられる。これらの出土位置は、22が基礎Ｂ７周辺から、他は堀内の堆積土から出土したものである。

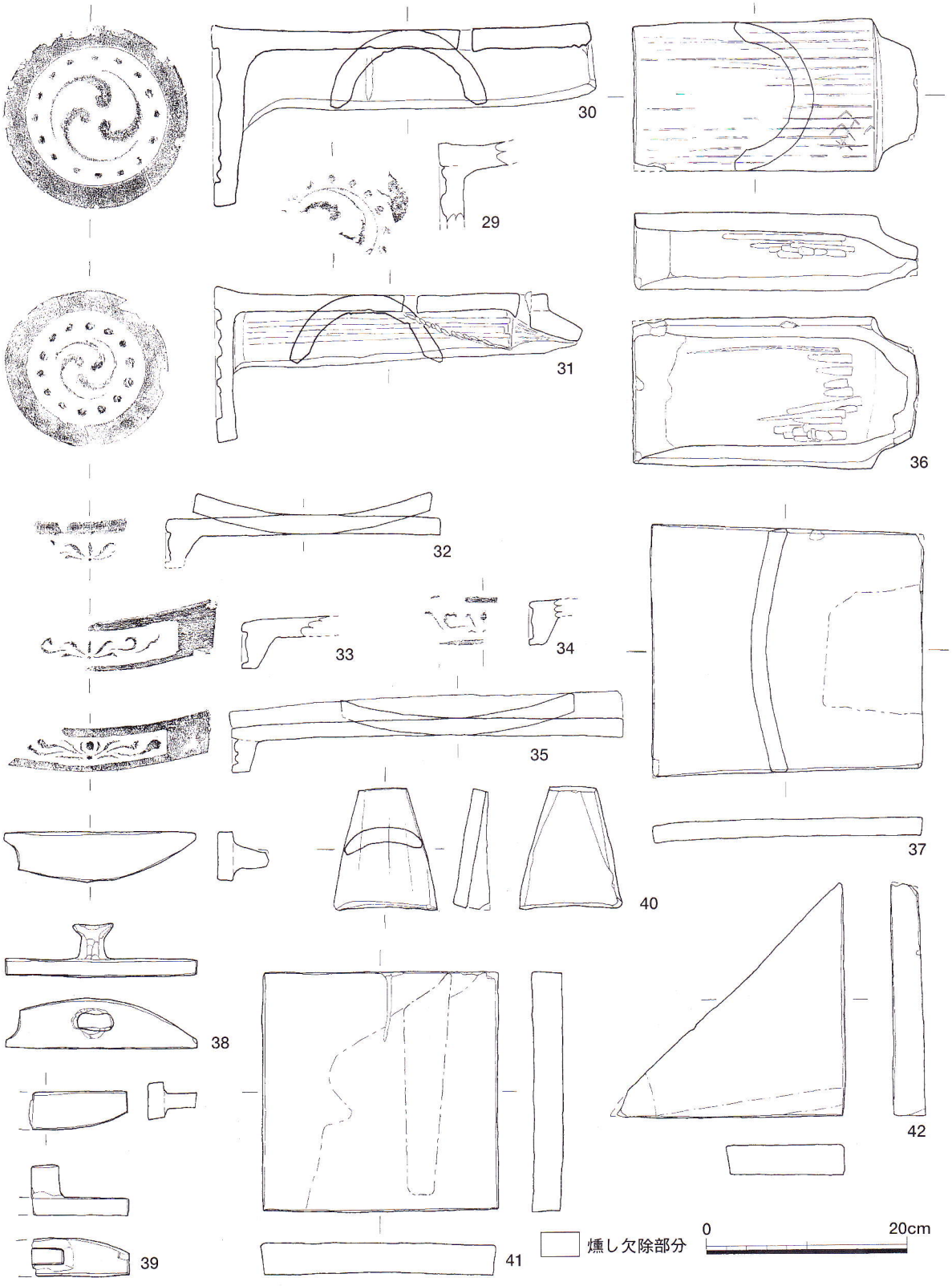


第15図　遺物実測図３

（2）**瓦**（第16図、図版14・15）

出土した瓦は、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、桟瓦、鬼瓦、鳥伏間、棟込瓦、塼などである。

29～31は左巻き三巴文軒丸瓦である。29は復元瓦当径15.0cm、瓦当厚2.3cm、厚さ2.3cmを測る。瓦当文様は巴頭部と尾部が接することによって圏線状を呈し、復元珠文数は18個である。また瓦当部と丸瓦部との接合面にキザミ目状の痕跡がみられる。30は瓦当径17.8cm、瓦当厚2.3cm、厚さ1.7cm、



第16図　遺物実測図４

全長38.4cmを測り、珠文数は16個である。丸瓦部凸面側から釘穴が１ヶ所穿たれている。また凸面にはヘラミガキ、凹面には吊り紐痕がみられる。玉縁部をもたないことから掛瓦として葺かれていたものとみられる。31は瓦当径15.5cm、瓦当厚1.8cm、厚さ1.5cm、全長36.5cmを測り、珠文数は14個である。丸瓦部凸面から釘穴が2ヶ所穿たれ釘の付着がみられるほか、凹面には吊り紐痕、タタキの後ナデ調整がみられる。

32～35は均整唐草文軒平瓦である。32は復元瓦当上部幅23.3cm、復元瓦当幅4.7cm、狭端幅22.9cm、厚さ1.7cm、全長27.8cmを測る。33は復元瓦当上部幅25.5cm、瓦当幅4.5cm、厚さ1.9cmを測る。34は瓦当幅4.4cm、厚さ1.7cmを測る。瓦当文様の唐草上方はくびれをもつものである。32～34の中心飾りは簡略化された蓮華文である。これらの内32・33は同文様である。35は復元瓦当上部幅23.0cm、復元瓦当幅4.3cm、復元狭端幅22.0cm、厚さ1.7cm、全長38.8cmを測る。瓦当の中心飾りは橘文である。

36は丸瓦である。体部の幅は14.9cmであるが、木口側が14.1cmと狭くなり、厚さ1.8cm、高さ7.6cm、長さ24.1cmを測る。また玉縁部の長さは4.0cmである。凸面には格子目状タタキ後ミガキ、凹面にはタタキの後ナデ調整がみられる。37は平瓦である。広端幅24.7cm、狭端幅22.5cm、厚さ1.5cm、全長27.0cmを測る。38・39は面戸瓦である。38は長さ18.9cm、上下幅5.0cm、厚さ1.5cmを測る。差込部は貼付の後に手づくね成形されており先端が二股に分かれる形状で、長さ3.4cm、最大幅4.0cm、最小幅2.2cmを測る。39は残存長9.7cm、上下幅3.8cm、厚さ1.6cm、差込部は立方体で長さ3.2cm、幅1.5cmを測る。差込部の接合面にキザミ目状の痕跡がみられる。40は棟込瓦の輪違いで広端幅10.2cm、復元狭端幅4.1cm、厚さ1.4cm、高さ3.7cm、全長11.9cmを測る。41・42は塼である。41は方形で一辺23.4cm、厚さ2.9cmを測る。表面右半分にはタールが付着している。42は一辺22.9cmの方形を対角線で半裁したものであり、厚さ3.0cmを測る。

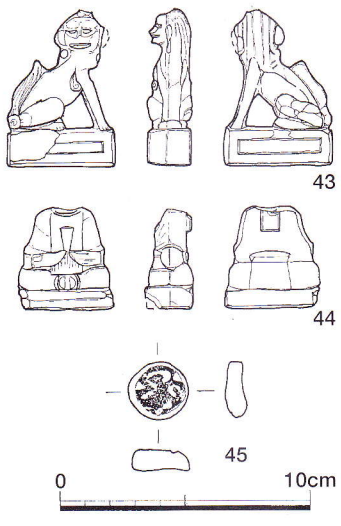
29は第１区第２層、30・32・33・36・37・40・41は第３区採集、31は第３区第１層、34・35は第１区撹乱、38は第１区第１層、39は第３区基礎A５周辺、42は第１区第５層から出土している。特に第３区からは30・33と同文様や36・37と同規格の瓦が多く出土しているが、その出土位置は二の丸石垣上の多聞櫓に対応することから、この建物に葺かれていた瓦が転落したものと考えられる。

（３）土製品（第17図、図版16）

43・44は土人形である。２つの型を合わせて成形され、器壁表面には離砂の痕跡がみられる。また胎土には結晶片岩が含まれる。43は狛犬、44は内裏雛とみられる。45は泥面子で、直径2.3cm、厚さ0.8cmを測る。型押しされた文様は表面の磨滅が著しいため不明瞭である。43は第３区第２層、44は第１区第２d層、45は第１区撹乱出土である。

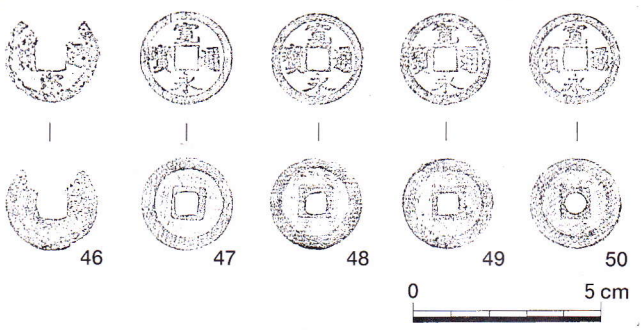
（４）金属製品（第18～20図、図版16）

46は皇宋通寶（初鋳1038年）で、第１区第３層から出土した。直径は2.5cmを測る。47～50は銅銭の寛永通寶である。直径はすべて2.4cm、重量は4.0ｇ前後を量る。50のみ中央の穿孔が円形を呈する。いずれも「寶」の字体からいわゆる古寛永通寶であるとみられる。出土位置は第３区サブトレンチ２の第２層であり、未掲載のものを含め合計12枚出土している。



第17図　遺物実測図５

鉄製鎹は第３区の橋脚遺構周辺から合計15点出土しており、15～18cmの長さのものが中心である。ここではその内３点を図示した。51は手違鎹で長さ15.5cm、幅・厚さ共1.0cmを測り、重量120ｇである。52・53は鎹で、長さは52が17.2cm、53が21.9cmを測り、重量はそれぞれ80ｇ、460ｇである。51は基礎Ｂ５、52は基礎Ａ５、53は基礎Ｃ４の周辺から出土した。

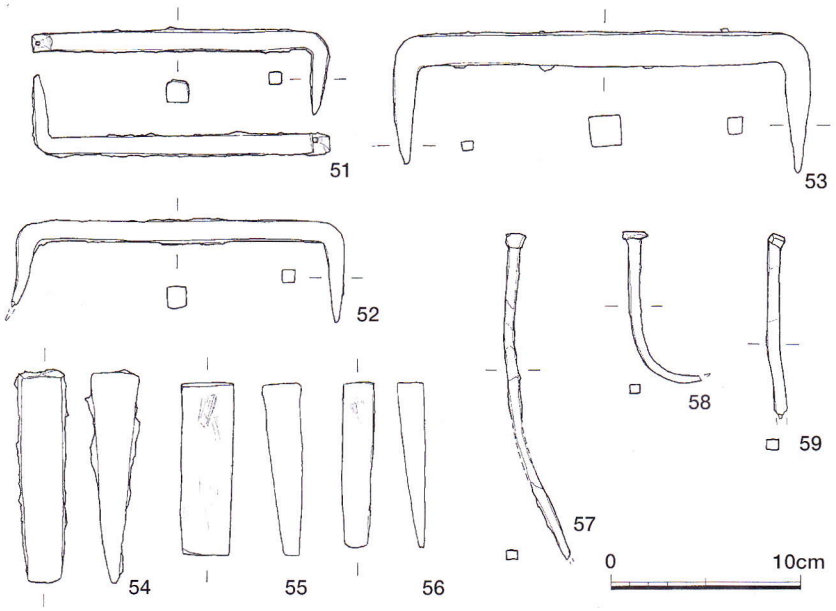


第18図　遺物実測図６

54～56は鉄製の楔である。基礎Ａ４ほぞ穴から５点（55・56）、基礎Ｂ４ほぞ穴から２点、基礎Ａ７周辺から２点（54）出土しており、これらは橋脚の固定に使用したとみられる。長さは８cmから９cmのものがほとんどである。54は出土した楔の中で最大の法量のもので、長さ8.7cm、幅1.6cm、厚さ1.3cmを測る。55・56の上端部は潰れてやや変形しており、表裏面の上部には直線的な窪みがみられる。重量は54から225ｇ、275ｇ、86ｇを量る。

57・58は頭巻釘、59は折釘である。釘は各調査区で50点程度出土しているが、第３区出土のもの３点を図示した。57・59は第３区サブトレンチ２第１層、58は基礎Ｂ５周辺から出土した。

60～64は銅板である。合計９点出土した内、全形をよく残すもの５点を図示した。60・61は長さが33cm、幅が29cmと同一の規格のものである。上端は表側、下端は裏側に約2.0cmの幅で折り返しており、左右には角釘により開けられた穴が９ないしは10ヶ所みられる。釘はすべて同一面から打ちつけており、61には残存長1.8cm、幅2.0mmの角釘が１点確認できる。左右の釘穴の周囲、端部から約2.5cm付近において、左側は下向きに、右側は上向きに折り曲げている。裏面には黒漆と考えられるタール状のものが付着している。62は長さ34.0cm、幅39.0cmを測るもので、右側は巻き込むように２回折り曲げている。折り曲げ単位での幅は左から26cm、６cm、７cmを測る。右端部には角釘が１点残存している。63は断面L字状、平面形は一辺が斜めの台形状を呈するものである。長さ22.0cm、上端幅34.3cm、下端幅12.5cmで上面部分の幅は6.5cmを測る。60～62とは異なり、釘穴は３ヶ所のみである。右上隅には別個体の銅板片がみられ、互いに折り返した部分を組み合わせて連結していることがわかる。64は長さ12.2cm、幅9.8cmの小型のもので、左右端部中央にそれぞれ釘穴が１つずつみられる。以上の銅板の色調はすべて赤銅色で、厚さは0.5mmと薄い。これらは出土位置から御橋廊下の建築部材である



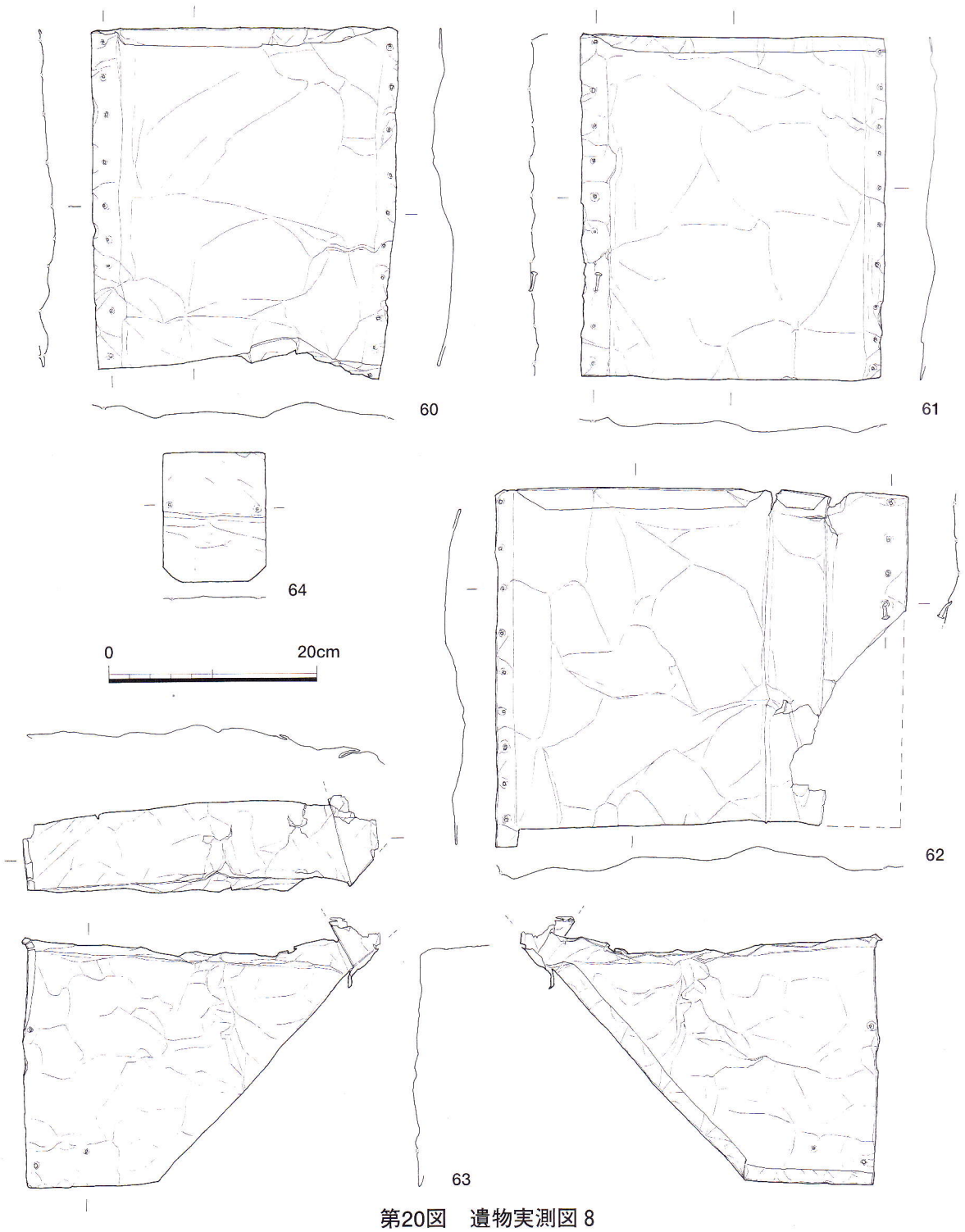
第19図　遺物実測図７

可能性が高いとみられる。すべて第３区から出土したもので、60・61・64は基礎Ｂ５、62は基礎Ｃ４周辺から、63は堀内から採集されたものである。その他キセルの雁首や吸口等も出土している。

（５）木製品（第21～23図、図版17・18）

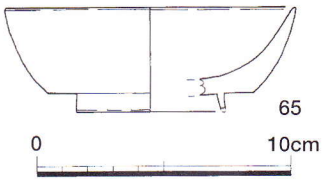
木製品はすべて第３区で出土したもので、漆器や下駄、板材、込栓の他、石垣周辺から判読不明の墨書が書かれたこけら板（図版18－ａ・ｂ）や加工痕のある木材、木杭等が出土している。

65は漆器の椀である。口径11.2cm、底径5.9cm、器高4.0cmを測るもので、内外面とも黒色に発色する。基礎Ａ４周辺から出土した。66・67は下駄である。66は連歯下駄で長さ19.8cm、幅8.6cm、高さ2.2cmを測る。平面形は長円形で、表面には花びらと思われる絵が顔料で描かれているが、保存状態



第20図　遺物実測図８

が悪く判然としない。区形の歯は右側及び後歯を中心にすり減っている。67はいわゆる木履で長さ18.2cm、幅9.0cm、高さ5.2cmを測る。裏面には黒漆が塗布されており、表面にもわずかに赤色部分が確認できる。共に形状・大きさから女性用とみられる。66は第３区での採集、67はサブトレンチ４第２層から出土した。

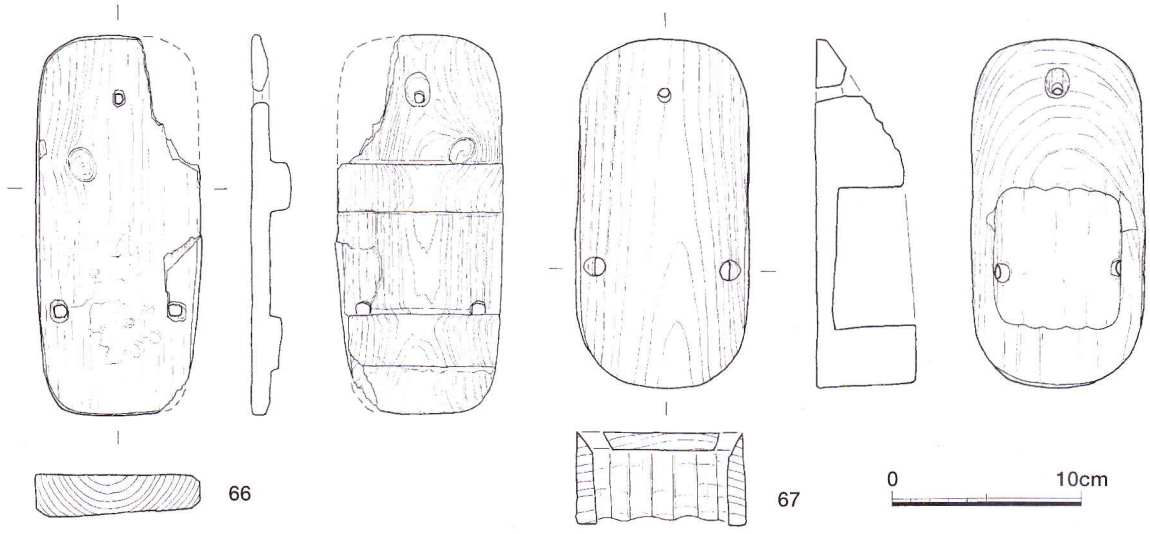


第21図　遺物実測図９

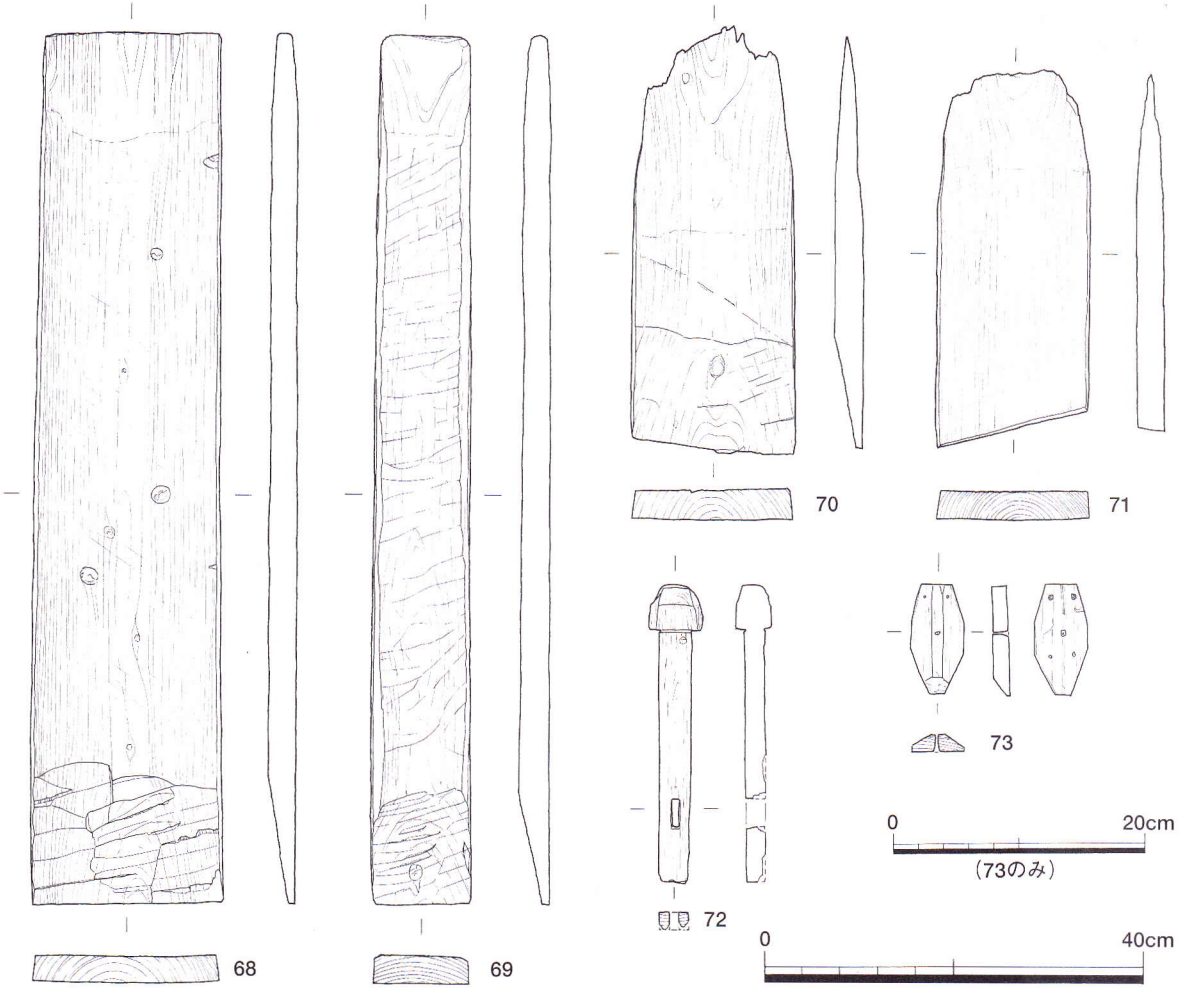
68～71は橋脚基礎の板材である。主に第３区堀中央部分に流出していたものを採集したもので、その内４点を図示した。68は長さ90cm、幅20cm、厚さ３cmを測るもので、表裏面には鋸痕が残る。表面の下端部から約15cmの範囲にはちょうな等で斜めに削っている様子が観察でき、その痕跡から工具幅は6.7cm前後と推定できる。側面は鉋を使用したとみられるが、やや傾斜をつけて調整されており、断面が台形状を呈している。これは板材を円形に組むための工夫と考えられる。また上端部はやや潰れているが、これは板材を打ち込んだ痕跡とみられる。69は幅10cmを測るもので、長さ、厚さは68と同一である。表裏面には幅２～３cmの調整痕が横方向にみられる。68は基礎A４周辺、69は基礎C４周辺で採集したものである。70・71は基礎B２に使用されていた板材である。70は長さ44.8cm、幅16.9cm、71は長さ40.0cm、幅15.9cmを測り、厚さはどちらも3.0cmである。これら橋脚基礎の板材は68と同サイズのものがその多くを占めており、69のような幅が狭い板材は円形に組む際の間隔の調整に使用されたとみられる。また70・71は使用された場所の水深が浅いためか1/2程度の長さとなっており、中には71のように下端部に加工を施さないものも存在する。いずれも上部には水の浸食による影響がみられる。以上の板材の材質は全て杉である。木取りについては、表面に山模様の年輪が観察できることから板目材と考えられ、その断面がいずれも左右均等であることから板目材でも中央部分を選択して使用したとみられる。

72は込栓とみられる。法量は長さ31.5cm、幅3.5cm、厚さ2.0cmを測り、頭部の幅は5.5cmを測る。１つの木材から作り出されており、くびれ部分には鋸痕が観察できる。木材を組み合わせる際に用いる部材であり、頭部から穿孔部分までの間隔から、使用した木材の幅は17cm程度であったとみられる。第３区で採集した。

73と図版18-ｃは不明木製品である。73は裏面には釘を打ちつけたとみられる穴が３ヶ所、貫通していない穴が４ヶ所、さらに上部には切り込みが確認できる。ｃは頭部が72と同様の形態であるが、途中で切断されており、用途は不明である。ともに第３区から採集したものである。



第22図　遺物実測図10

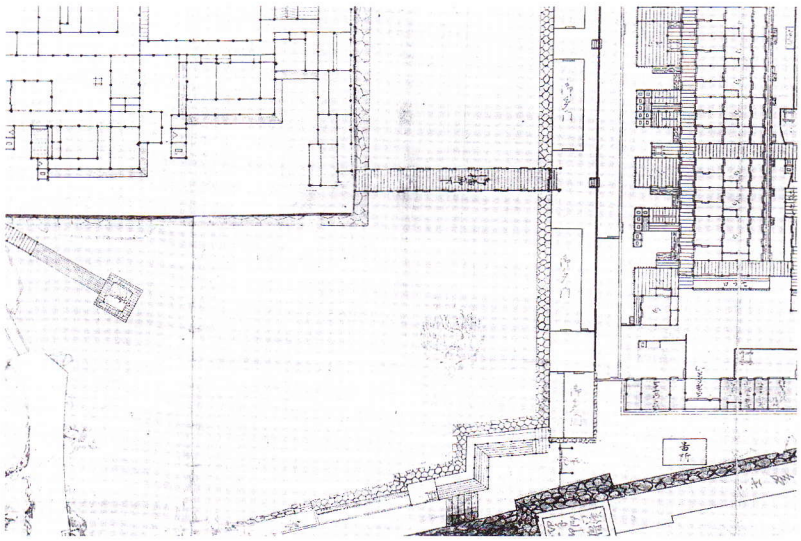


第23図　遺物実測図11

7．まとめ

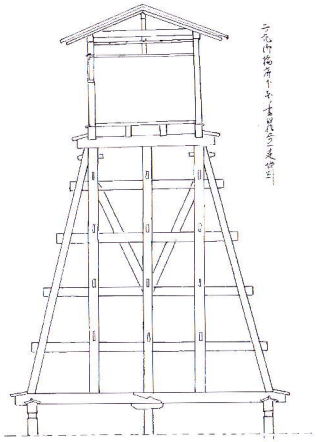
（1）御橋廊下について

御橋廊下は二の丸と西の丸を結んでいた廊下橋であり、その架橋位置は『和歌山御城内惣御絵図』(註1)（第24図）から、外観は『二ノ丸御橋廊下桁行弐拾歩一建地割』他３枚の絵図（第25図）(註2)から知ることができる。堀東側の二の丸は藩主の居館であると同時に政庁がおかれた所で、橋の取り付き位置は大奥でも南側、奥女中の部屋である長局の西側にあたる。その対岸の西の丸は藩主の隠居所としての機能を持っており、大きく観能の施設と数寄を楽しむ施設に分かれていた。このような両施設の性格などからみても、御橋廊下は限られた人のみが通行したと考えられる。『和歌山御城内惣御絵図』の推定年代から

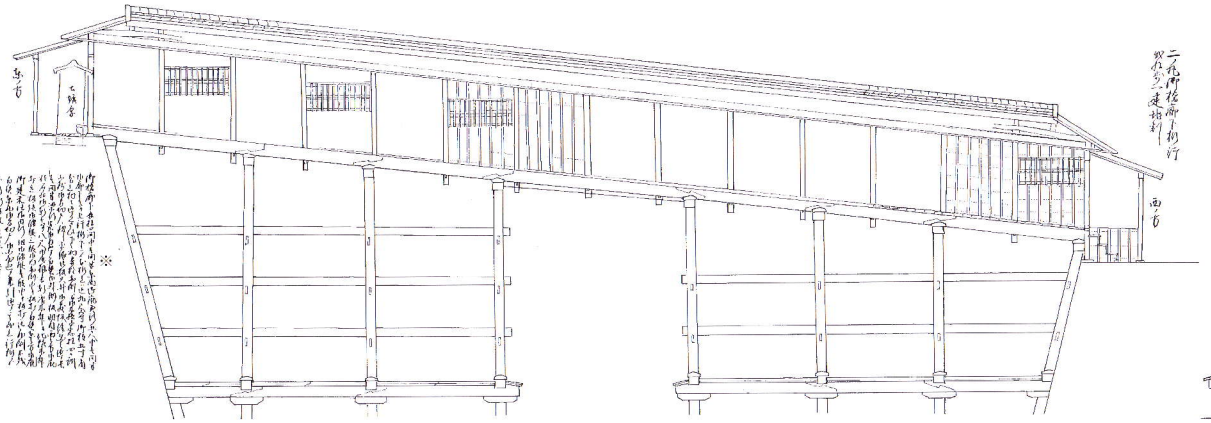


第24図　『和歌山御城内惣御絵図』（御橋廊下周辺）（上が北）

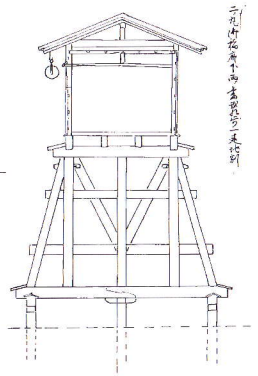
二ノ丸御橋廊下
東ノ画弐拾歩一建地割



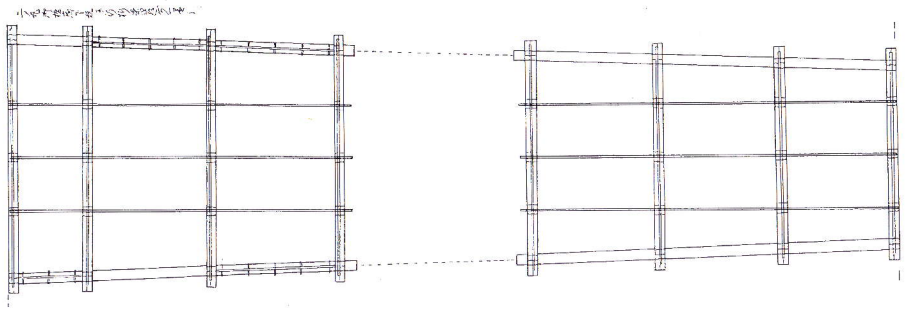
二ノ丸御橋廊下桁行弐拾歩一建地割



二ノ丸御橋廊下
西ノ画弐拾歩一建地割



二ノ丸御橋廊下柱並行桁梁弐拾歩一墨引



※御橋廊下長拾四間、巾壱間半、東西御庇奥行五尺、巾壱間半、御廊下高サ上行桁下ハ迄九尺五寸、御柱五寸角、尤上枘者返りくさひ、下之枘鼻栓、両側而御木格子窓拾四ヶ所、不残御間切戸一致し、平縁御板、天井御敷板、絵図之通り、長壱間半、梁行張御内廻り白壁、御外側板羽目、西之方御庇柱石居、御軒高サ八尺、御屋根裏軒広木舞幷化粧木舞打立板張、御踏段三段、御内両側巾キ板打白壁、東之方御庇御建前仕様同断、但御踏段壱段、巾キ板打、御外側不残白壁、東西御間切戸、御小屋廻り朱引通り、其外上行桁迄下行桁幷杭共、御絵図之通り、

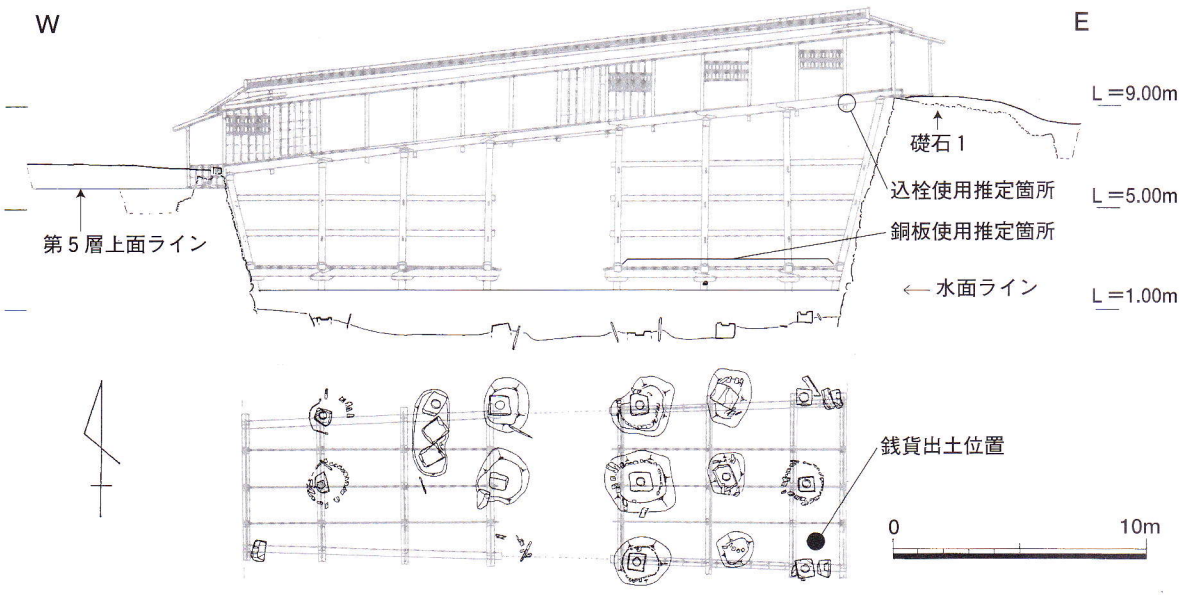
第25図　御橋廊下絵図　（1/10）（原図からトレース）

考えると18世紀末には存在していたとみられるが、構築時期を示す史料は現在まで知られていない。今回、発掘調査によってこれまで絵図等で知られていた御橋廊下を遺構として確認したとともに、その関連遺物についても重要な知見を得ることができた。ここでいくつかの点について考察を行いたい。

［橋脚遺構について］　橋脚基礎は、橋脚の沈下を防ぐための礎石を配し、板材で覆った内外を粘土と砂礫で補強するという工法を用いていたことを確認することができた。同様の工法は西の丸庭園の鳶魚閣でも用いられていたことが報告されている。(註3) なお河川の土木工事に関する文献には類似した工法がみられるようであるが、(註4) 現在のところ城郭における類例は知られていない。他の橋脚遺構の調査例としては金沢城・橋爪御門橋の調査が挙げられるが、この橋では和歌山城の例とは異なり、礎石又は根石を埋設坑に据えることによって沈下・ずれを防いでいる。(註5) 御橋廊下においてこのような工法を用いた理由としては、サブトレンチ４でも確認しているように、堀内の地盤が砂地であることが考えられる。そのため、石垣を構築する際も厚い捨て石によって地盤を補強する必要があったと考えられ、板材を用いた橋脚基礎の根固めもこのような地盤の上に礎石を据えるために行った工法とみることができる。また一の橋の架け替えに伴って行われた第３次調査では、礎石自体を確認していないことから、同じ地盤でも重量のある建造物にのみ用いられた工法と考えられる。

次に橋脚基礎の位置関係をみてみたい。第26図は橋脚遺構と『二ノ丸御橋廊下桁行弐拾歩一建地割』・『二ノ丸御橋廊下柱並行桁梁弐拾歩一墨引』を合成したものである。礎石の配置は若干移動しているが、基本的な位置関係や規模は一致していることが読み取れる。絵図の年代は不詳であるためその時期は不明であるが、確認した橋脚遺構は絵図とほぼ同様の規格で構築されていることが明らかになった。西の丸側の取り付き部分については現在の石垣より約１ｍ下、第５層上面に位置しており、この面が当時の取り付き部に相当すると考えられる。また断面図と照合した結果、絵図には描かれていない水面下の位置関係について知ることができた。

橋脚遺構の礎石石材についてみてみると、今回検出した20基の礎石の内、17基が花崗閃緑岩であるのに対して、石垣の裾部にあたる基礎Ａ１・Ｃ１・Ｃ８の３基については砂岩を用いている。この



第26図　御橋廊下合成図

ような石材の違いは橋架け替え時に変更されたとみることもでき、17世紀代の石垣は砂岩が主体であることを考えると、砂岩の礎石は当初のものである可能性がある。また花崗閃緑岩については、石種の特徴から香川県庵治町に産する庵治石と酷似していることが指摘された。(註6) 従来、吉宗期の石垣に多く用いられた花崗岩質の石材は、新宮付近から運搬された花崗斑岩と考えられていたが、少なくとも橋脚基礎の石材に関しては他藩のものである可能性が高いことが明らかになった。

[関連遺物について]　第３区から出土した遺物の内、御橋廊下に関係するとみられる遺物に銭貨、銅板、込栓がある。特に橋脚基礎付近から出土した12枚の銭貨は、すべて古寛永通寶であることが注目される。古寛永通寶の鋳造年代は寛永13（1636）年から明暦２（1656）年頃までとされていることから、17世紀中頃以降に据え置かれたものと考えられる。先述の金沢城橋爪御門橋の調査では橋脚基礎周辺において柄鏡、刀、寛永通寶が出土しており、橋の架け替えに伴う儀礼行為の際に据え置かれたものとみられている。このような銭貨等を使用した儀礼は和歌山城の石垣にもみることができ、表坂登り口の石垣（第13次調査）では積み替え部分から寛永通寶13枚が出土している。御橋廊下の橋脚基礎付近から出土した銭貨もこのような城郭の普請に伴う祭祀の一つとして評価できるとともに、17世紀代に橋が存在した可能性をうかがわせる資料といえる。また出土した部材に関して、銅板は折り返し部分を組み合わせて一方向に連結するとみられる。面的には組み合わないため、屋根に用いられた可能性は低い。絵図の表現と出土した銅板の規模からみて、これらは最下段の桁柱の上部の保護のために葺かれたとみられ、小形のもの（64）は木口に用いたものと推定できる。込栓は５寸角程度の木材に使用されたものである。絵図に書かれた仕様には鼻栓とあり相違がみられるが、いずれにしろ柱をつなぎ止めるために使用されたもの(註7)と考えられる。

[取り付き部の石垣について]　御橋廊下の取り付き部分の石垣について、西の丸側（SV－４）は浅野期に、二の丸側（SV－２）は元和７（1621)年からの二の丸拡張に伴って築造されたと考えられている。橋は傾斜角７度という急角度で架けられていることから、二の丸拡張時から計画されていたものではなかったと推定される。調査の結果、SV－２石垣上部では第７層上面において赤変した礎石と焼土、石垣上端面を検出した。このような二の丸での火災の状況は第19次調査でも確認されているが、この火災が同一のものとみるならば、明暦元（1655）年11月13日の火災を想定することができる。またSV－４は18世紀代には積み直されたことが確認できた。この石垣改修の年代と絵図の年代を勘案するならば、御橋廊下はSV－４積み直し以降、18世紀末までの間に一度構築が行われたとみることができる。またSV－４積み直し以前に橋が存在したとするならば、この石垣改修を境に架け替えが行われたと考えることができる。

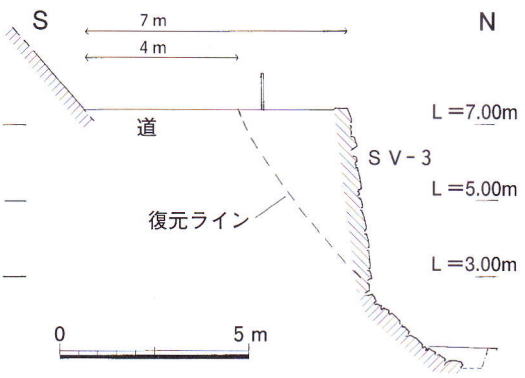
以上、御橋廊下に関して若干の考察を行った。その結果、橋脚遺構の工法や位置関係の検討及び関連遺物の使用箇所を推定し、礎石石材の違いやSV－４の積み直し時期等から橋の架け替え及び礎石石材の変更が行われた可能性を指摘した。出土した古寛永通寶からは、17世紀代に御橋廊下が存在した可能性が考えられる。また礎石石材について庵治石との類似が指摘されたが、今後城内に使用されている石材について、産地の再検討及びその流通経路の検討が課題となると思われる。

（２）周辺石垣について

今回の調査によって、周辺石垣の構築状況のいくつかが明らかになった。ここでは石垣構築方法や時期的変遷について検討する。

SV－１については、基底部の構造を確認することができなかったが、石垣の表面観察や裏込を掘り込んだ撹乱状況から１回以上の積み直しが行われていることがうかがえた。また石垣上面にみられた溝状の彫り込みは御橋廊下に関わる可能性が考えられたが、橋脚遺構との位置関係をみるとその位置はやや北にずれるようである。彫り込みが御橋廊下に関わるものとしても、積み直し等により移動している可能性が高い。

次にSV－２・３についてみてみると、まずSV－２では基底部下面及び前面に厚い捨石層が存在することが明らかとなったが、その基底部構築状況の確認までには至らなかった。SV－３については、砂層の上に礫を置き、その上に石垣を構築している状況を確認したが、深掘調査範囲は一部であるため、SV－２と同様胴木が使用されている可能性も残る。石垣の角度は先述の通りであるが、SV－２は途中でやや張り出しているものの、ほぼ直線的に同一の角度で構築しているのに対して、SV－３は基底部において石垣石材が上を向くほどの反りがみられる。２つの石垣の構築時期をみてみると、まずSV－３下部は隅角部の切り合いからSV－２構築以前に既に存在したものとみられ、使用石材や構築方法から和歌山城創建期に築かれたものと考えられる。次にSV－３上部はSV－２と同じ砂岩で交互に組み合わせて構築されていることから、頼宣の二の丸拡張時、つまりSV－２構築に伴ってSV－３上部が積み直しされたと考えられる（図版12）。SV－３の西端部は結晶片岩の岩盤が露出しており、これを利用して隅角部の算木積を構築しているが、堀内にも岩盤の露出が確認できることから石垣構築の際に周囲の岩盤を整形しているものとみられ、SV－３北側の柳島もこのような岩盤を利用し形作られたと推定できる。またSV－３の積み直し前の規模を現存する下部石垣及び鶴の渓東側の結晶片岩石垣より復元したところ、石垣天端が現在より約３m奥に位置することが推定できた（第27図）。このことから現在は約７mの幅を測るSV－３上面の平坦面は、積み直し前には４m程度であったものと考えられる。



第27図　SV-3石垣復元模式図

SV－４の積み直しとその工法について、深掘調査の状況から、①石垣石材を積む②裏込石を入れる③裏込埋土（第７層）を入れる④西の丸の構成土（第６層）を入れる、という工程を繰り返して構築されたことが推定できる。その時期は出土遺物から18世紀代とみられる。

以上、調査区周辺の石垣についてまとめたが、基底部に関しては部分的な掘削であったため、その工法全てを明らかにするまでには至らなかった。今後の調査による再検討が待たれる。

註記
（１）和歌山県立図書館蔵。年代は不詳だが寛永９（1797）年から同11（1799）年に描かれた原図に嘉永３（1850）年に部分的に加筆・訂正し、西の丸部分に幕末期の張り紙をしたものと考えられている。
（２）中村努氏所蔵、和歌山市立博物館寄託品。年代不詳。
（３）森蘊「和歌山城紅葉渓庭園復元整備概況」『史跡和歌山城保存管理計画書』　和歌山城管理事務所　1993年
（４）八木清勝氏の御教示による。
（５）『金沢城跡　平成９年度発掘調査成果の概要』　石川県埋蔵文化財センター　1997年
（６）奥田尚氏の御教示による。礎石周辺で採取した同質の石材を裸眼で観察していただいた。また、庵治石は文永年間の高野山町石の中にも確認されている。奥田尚「高野山町石の石種と採石地について」『古代学研究』150　古代学研究会　2000年
（７）鳴海祥博氏の御教示による。

【参考文献】
三尾　功『近世都市和歌山の研究』　思文閣出版　1994年
『史跡和歌山城第19次発掘調査概報』　㈶和歌山市文化体育振興事業団　1999年

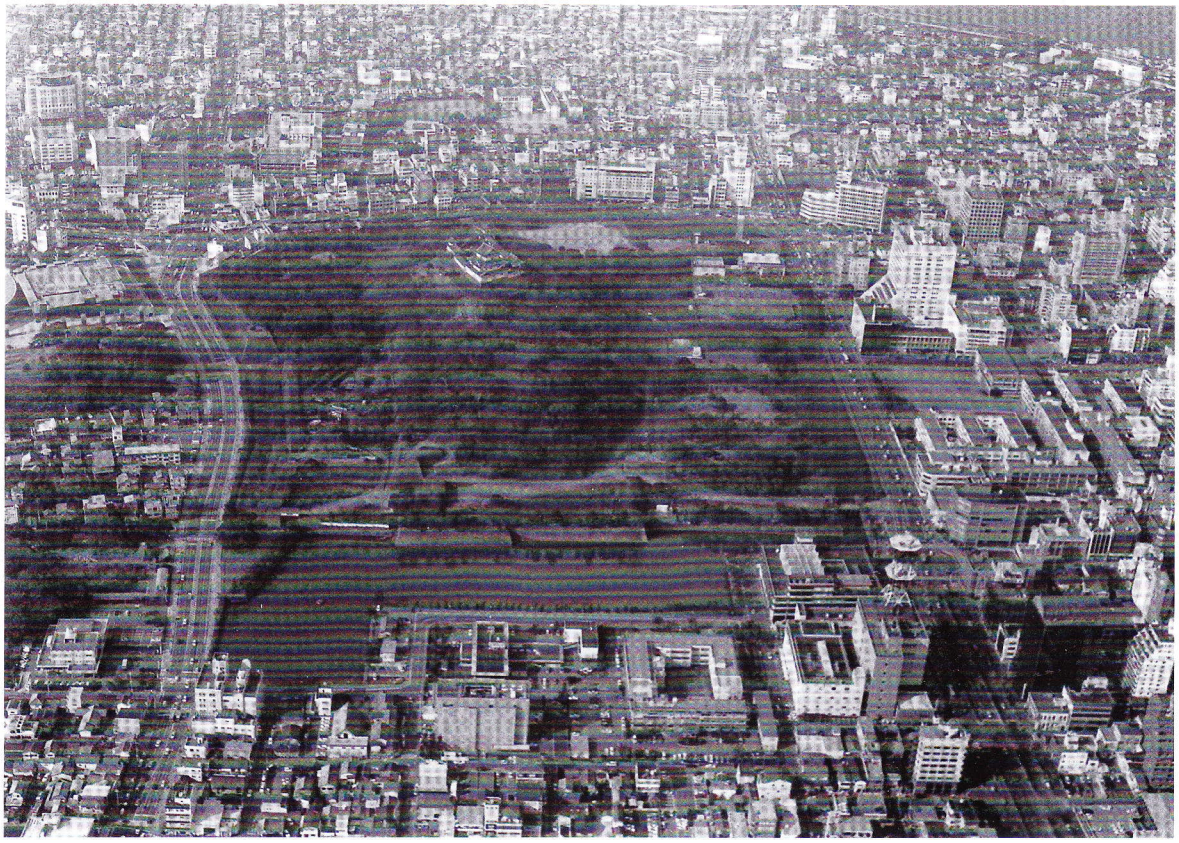
報告書抄録

ふりがな	しせきわかやまじょう　だい22じはっくつちょうさがいほう
書名	史跡和歌山城 第22次発掘調査概報
副書名	
巻次	
シリーズ名	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書
シリーズ番号	第25集
編集者名	高橋方紀・北野隆亮・奥村薫・川口修実
編集機関	財団法人 和歌山市文化体育振興事業団
所在地	〒640-8227　和歌山県和歌山市西汀丁29　TEL073-435-1195
発行年月日	西暦　2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
しせきわかやまじょう 史跡和歌山城	わかやまけん 和歌山県 わかやまし 和歌山市 いちばんちょう 一番丁	3020150	指1	34° 13′ 32″	135° 10′ 27″	19991222 20000313	500	堀浚渫 工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
史跡和歌山城	城跡	江戸時代	橋脚遺構 石垣 礎石 塼敷	陶磁器・瓦 銭貨・銅板 板材・込栓	絵図に描かれた「御橋廊下」の橋脚遺構を確認。

図　　版



調査地遠景（東から）

第１区　調査前の状況（東から）

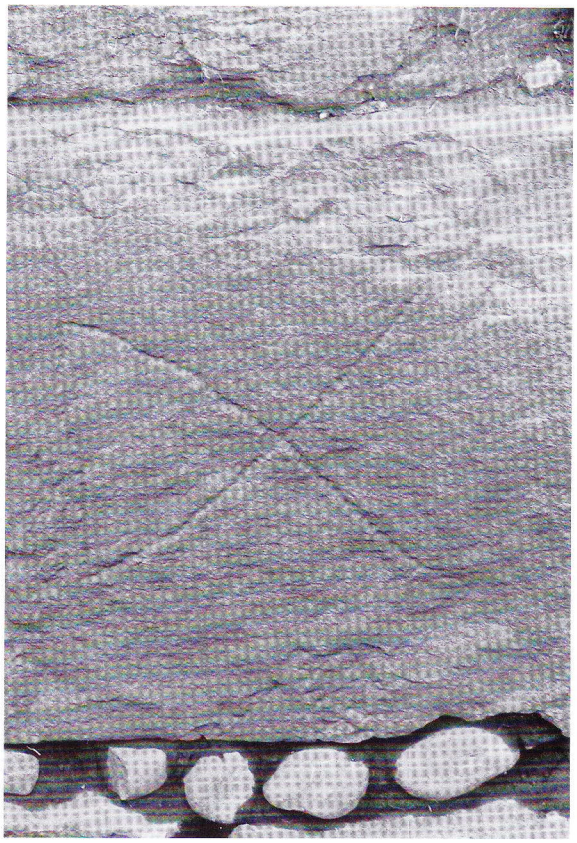
図版2

第１区　全景（東から）

第１区　全景（北から）

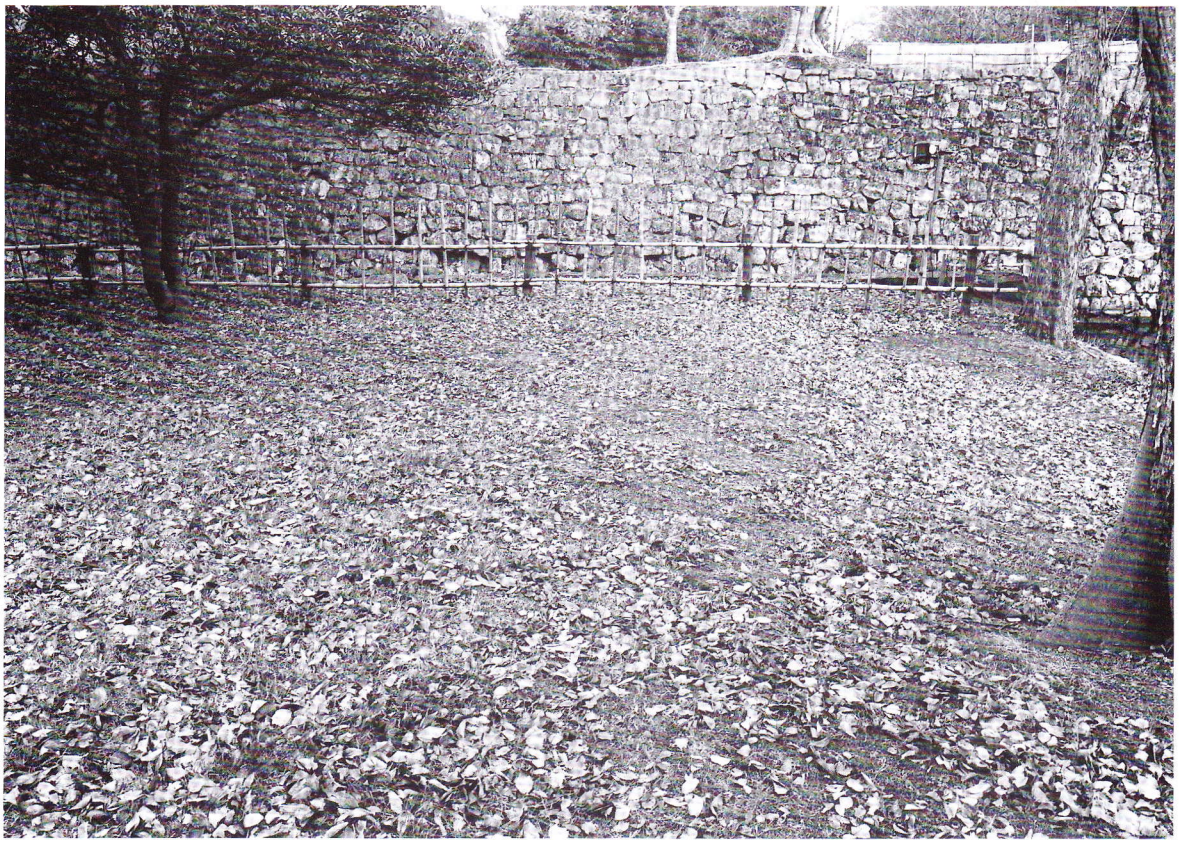
第１区　多門櫓礎石近景（南東から）

ＳＶ－１　刻印１

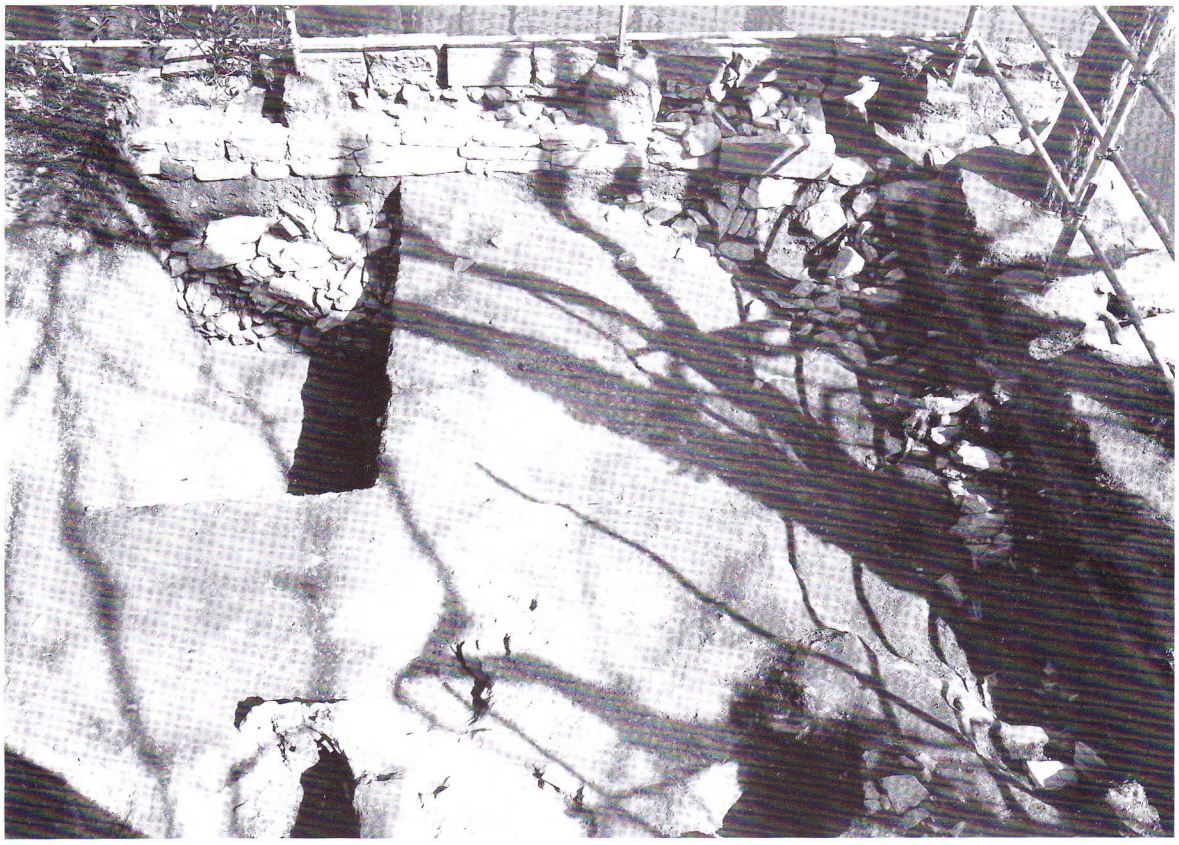


ＳＶ－１　刻印２

図版4



第２区　調査前の状況（西から）

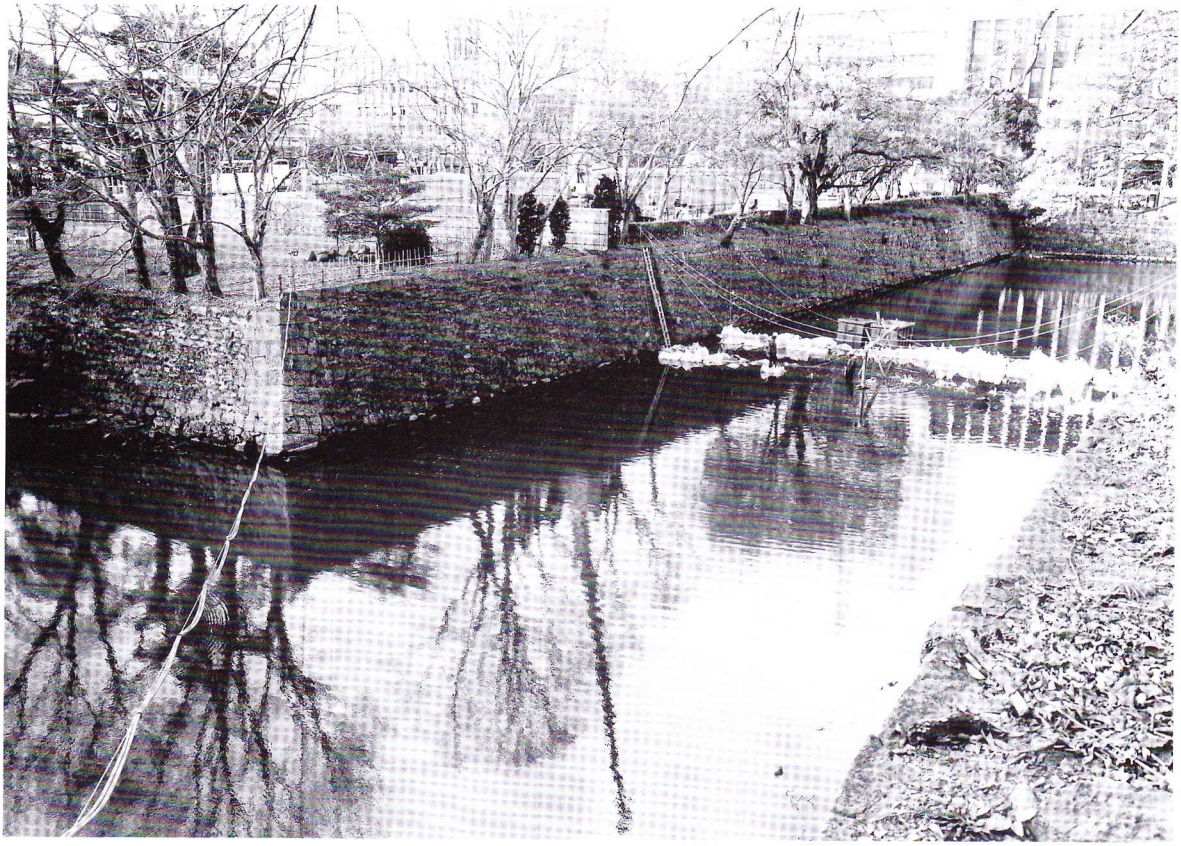


第２区　全景（西から）

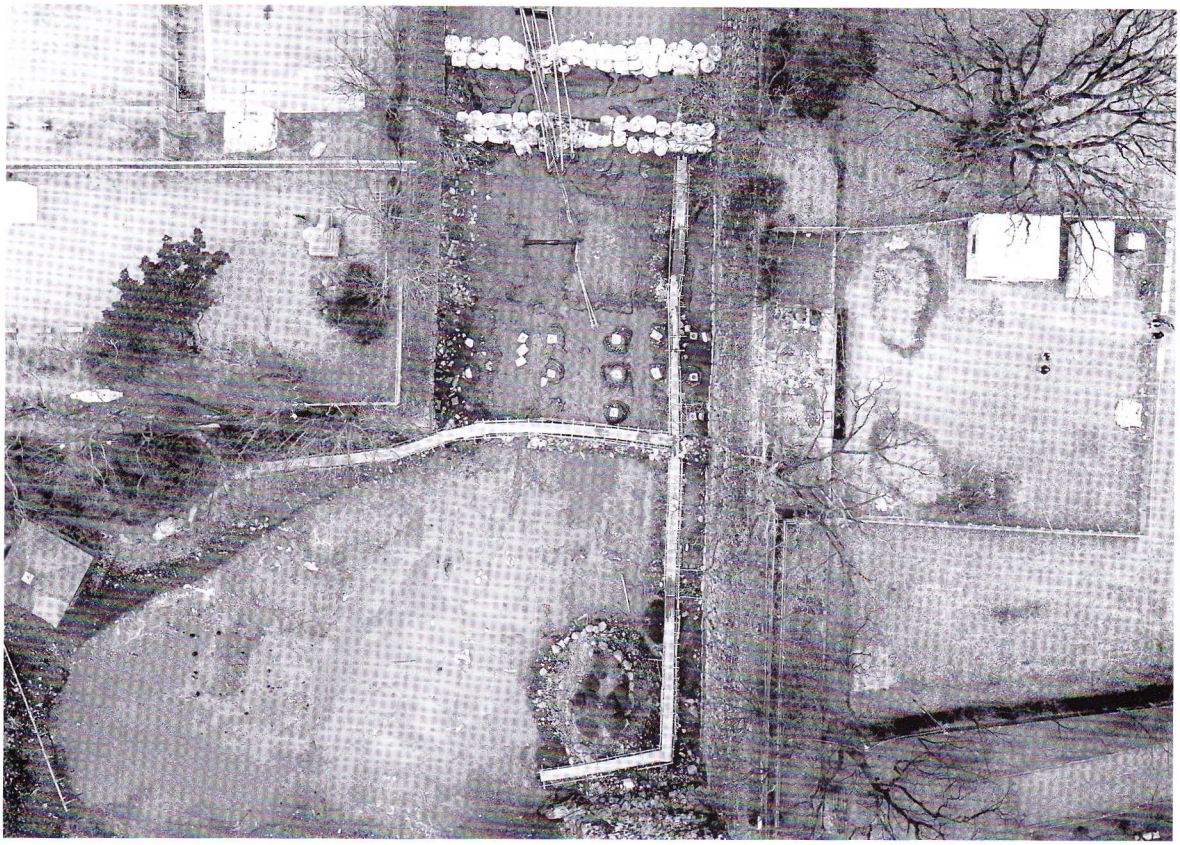
ＳＶ－４　裏込石検出状況（西から）

第２区　サブトレンチ１土層堆積状況（南から）

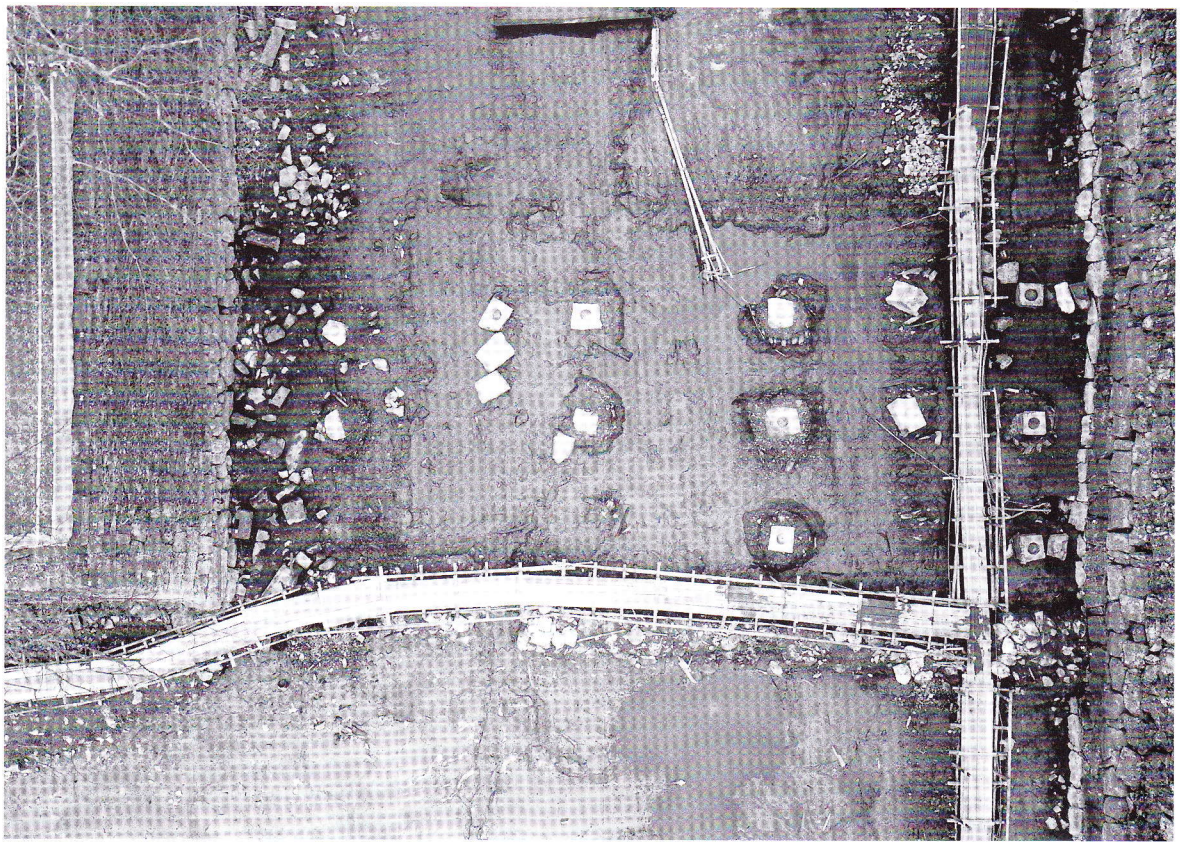
図版6



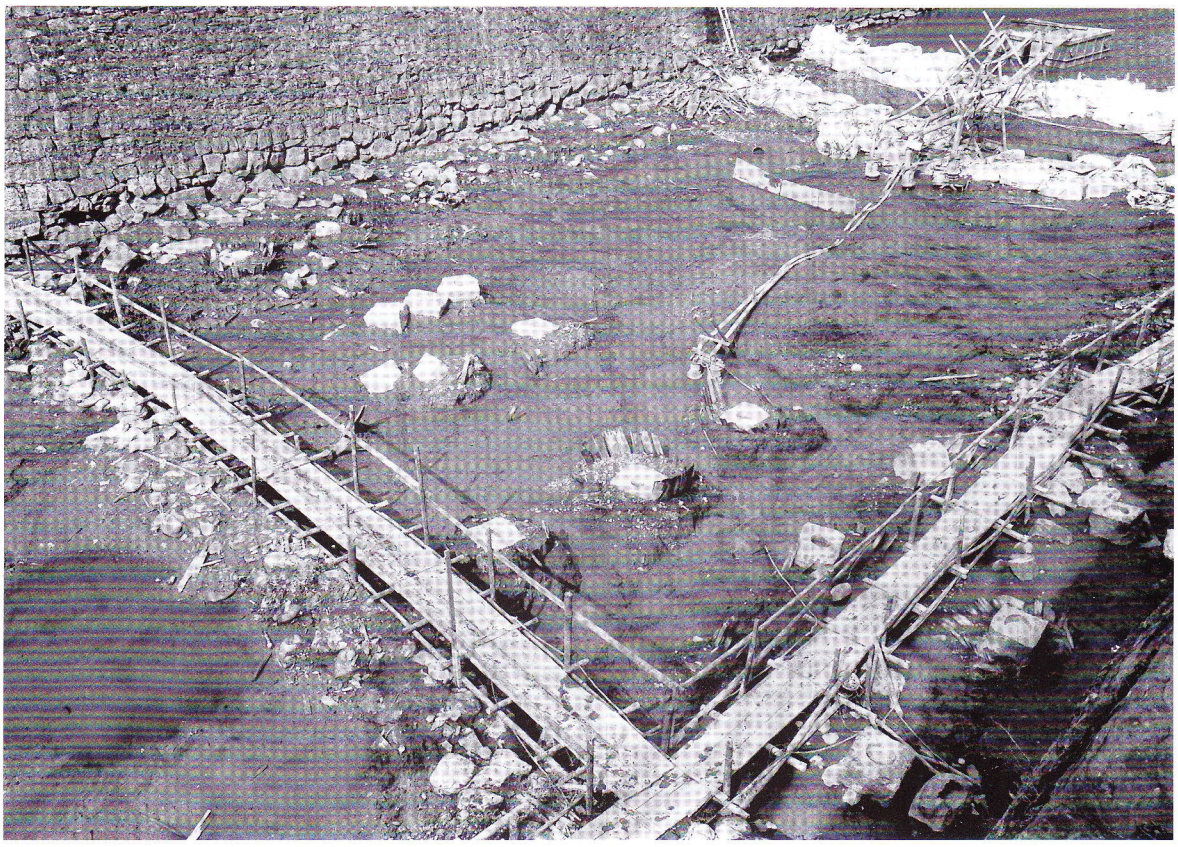
第３区　調査前の状況（南東から）



第３区　全景（上が北）

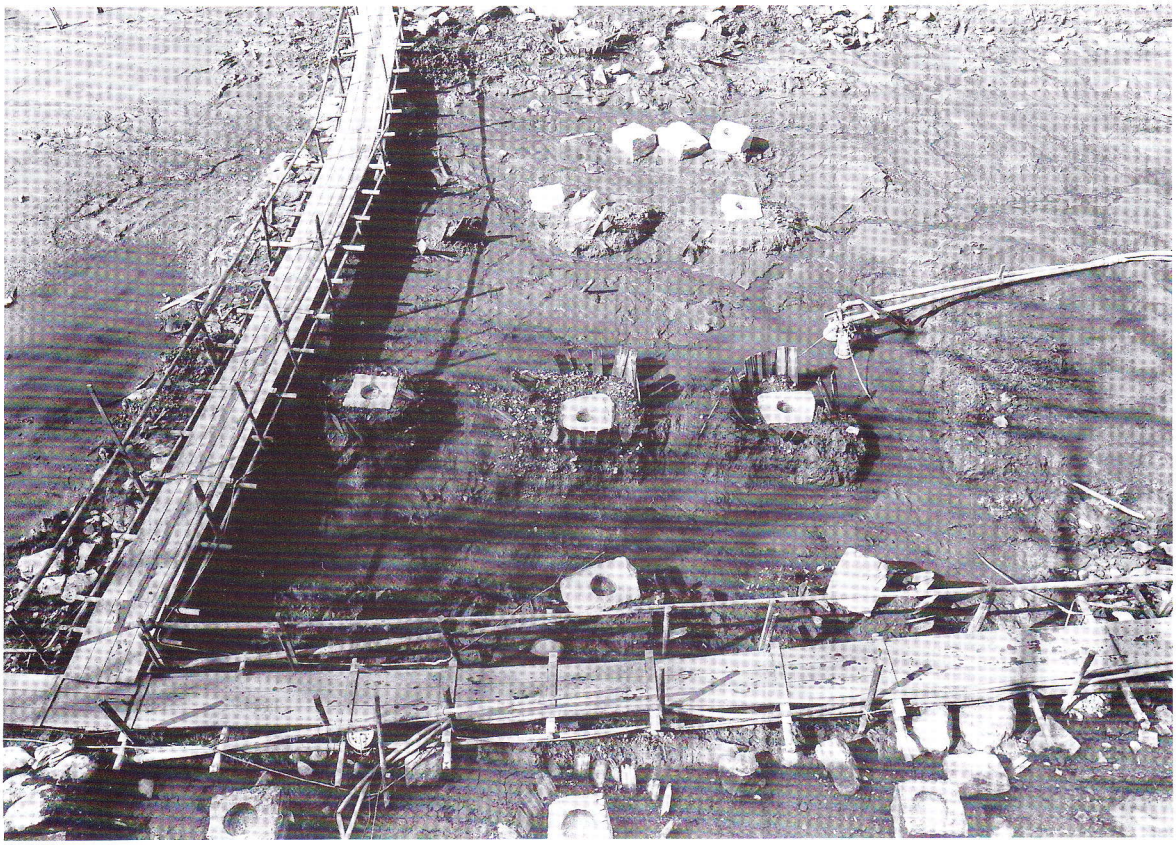


第３区　橋脚遺構（上が北）

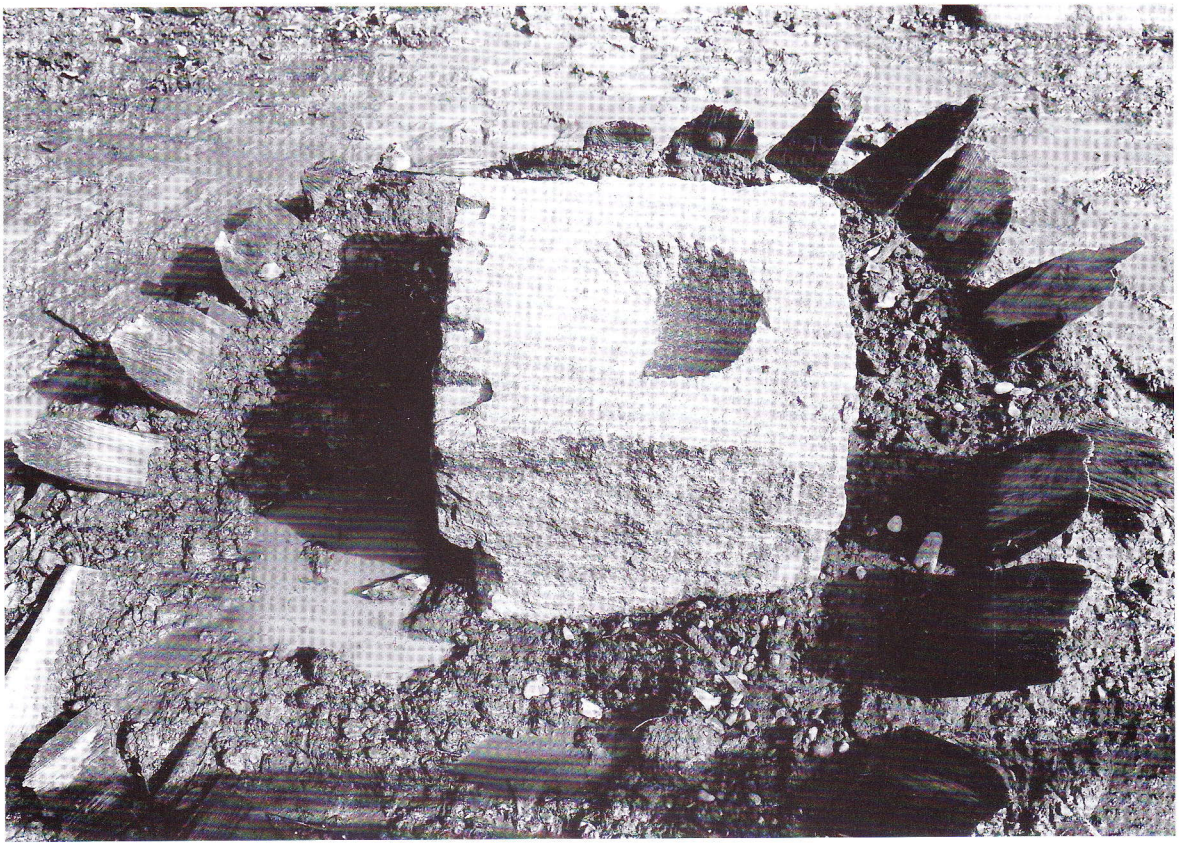


第３区　橋脚遺構（南東から）

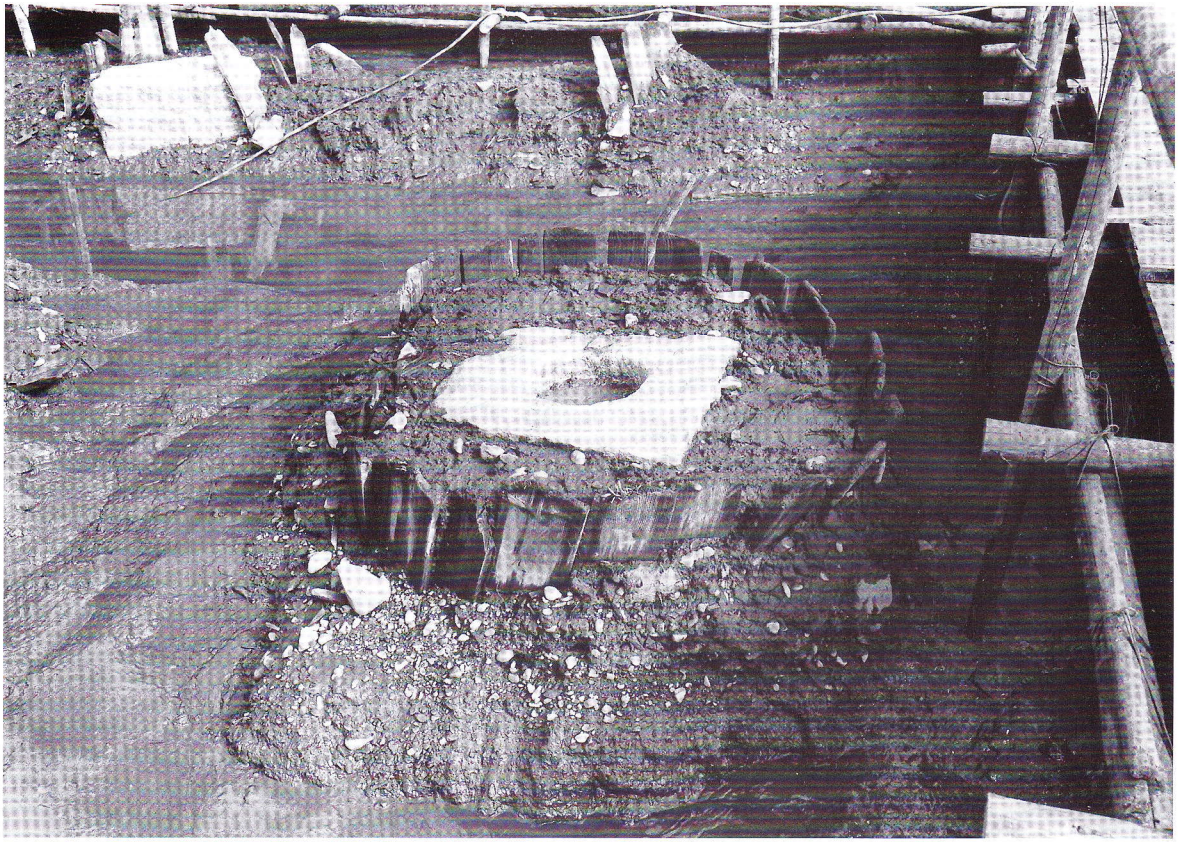
図版8



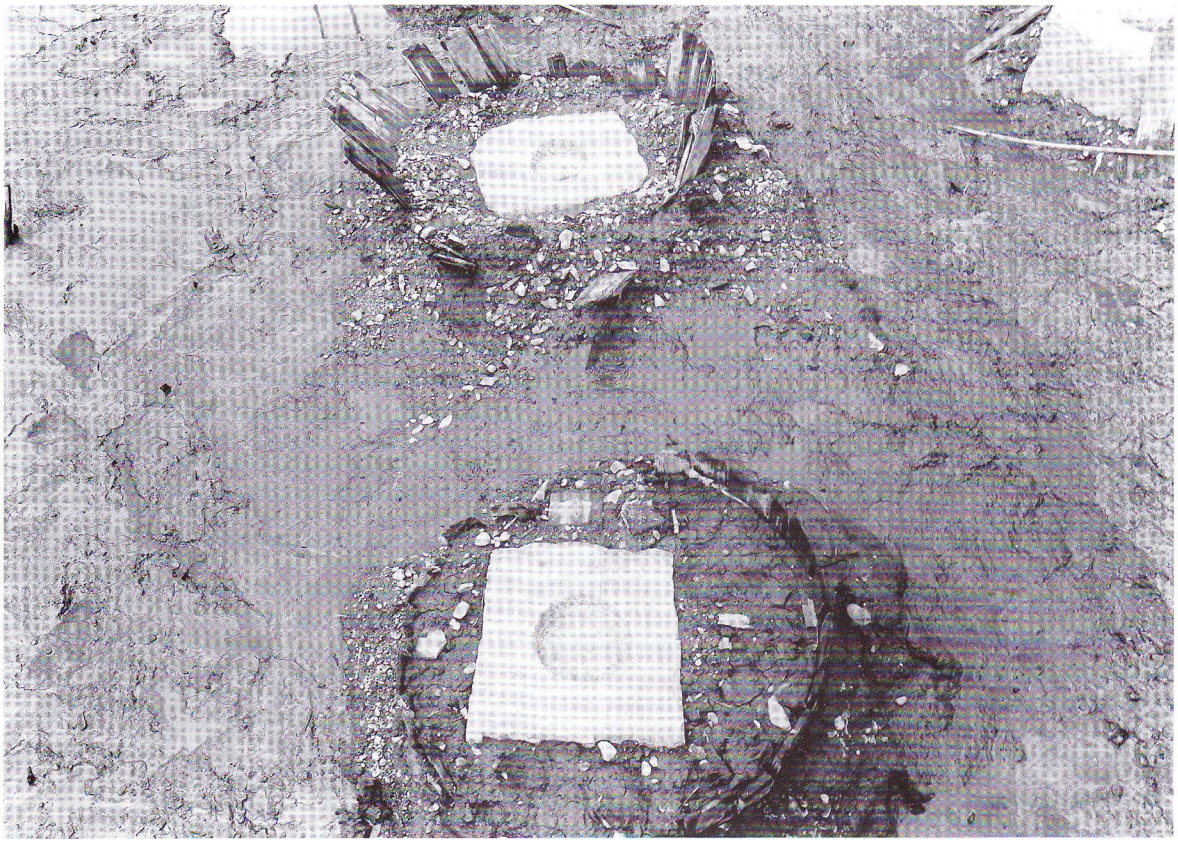
第３区　橋脚遺構（東から）



第３区　基礎Ｂ２（西から）

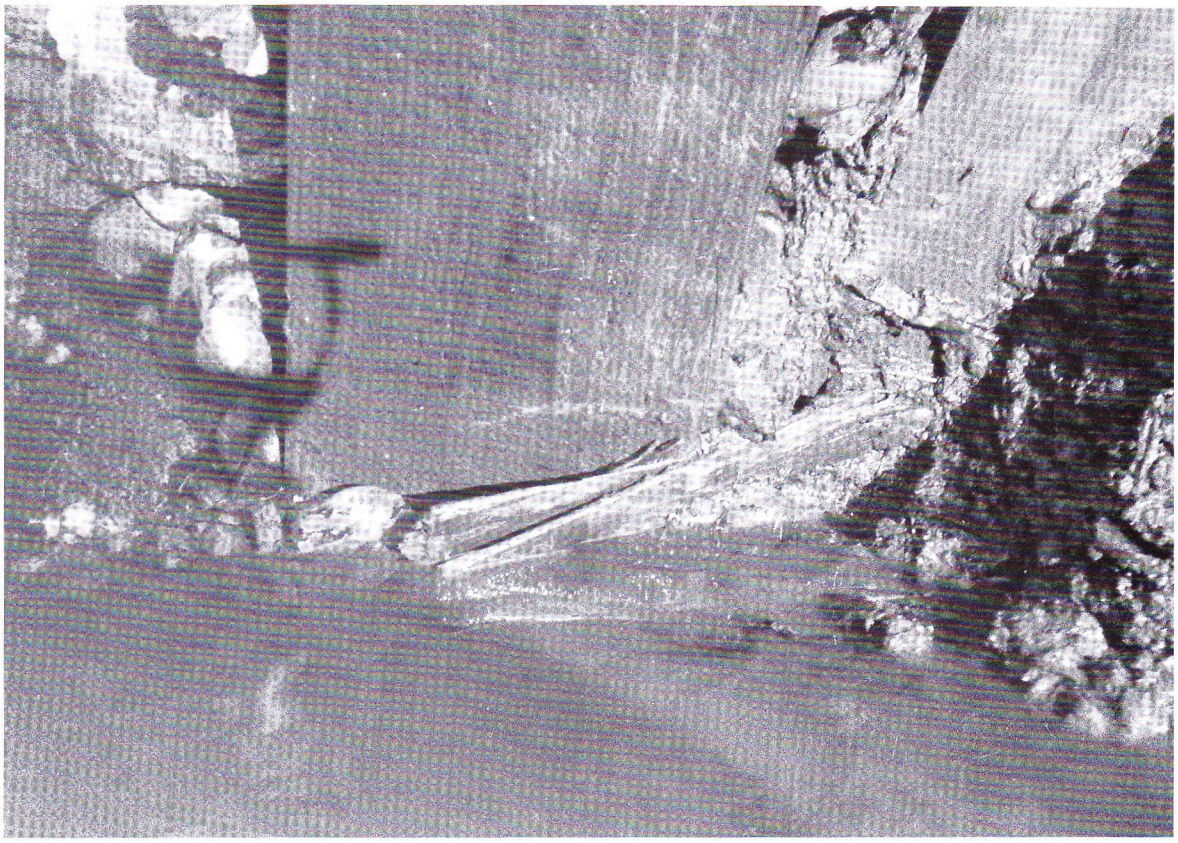


第３区　基礎Ｃ４（西から）



第３区　基礎Ｂ４・Ｃ４（南から）

図版10



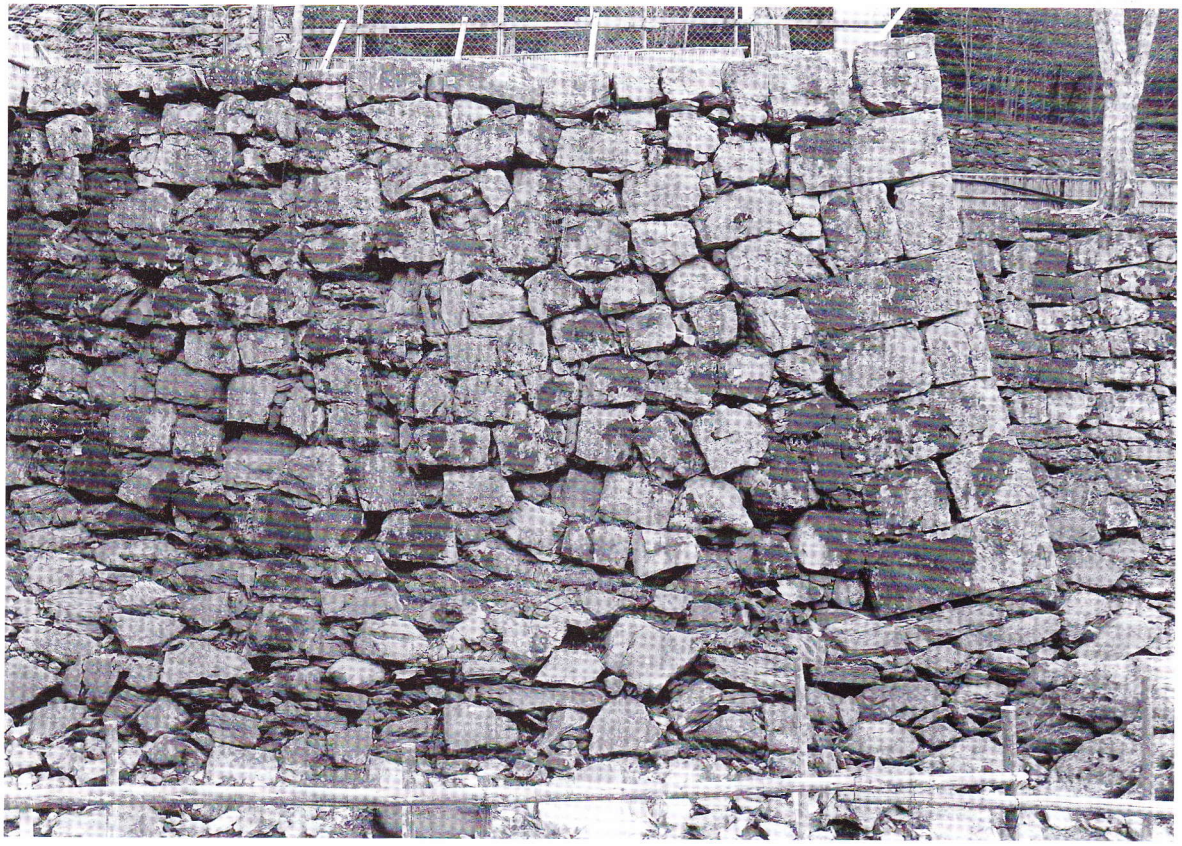
第３区　基礎Ｂ４タガ検出状況（西から）

第３区　サブトレンチ２土層堆積状況（北西から）

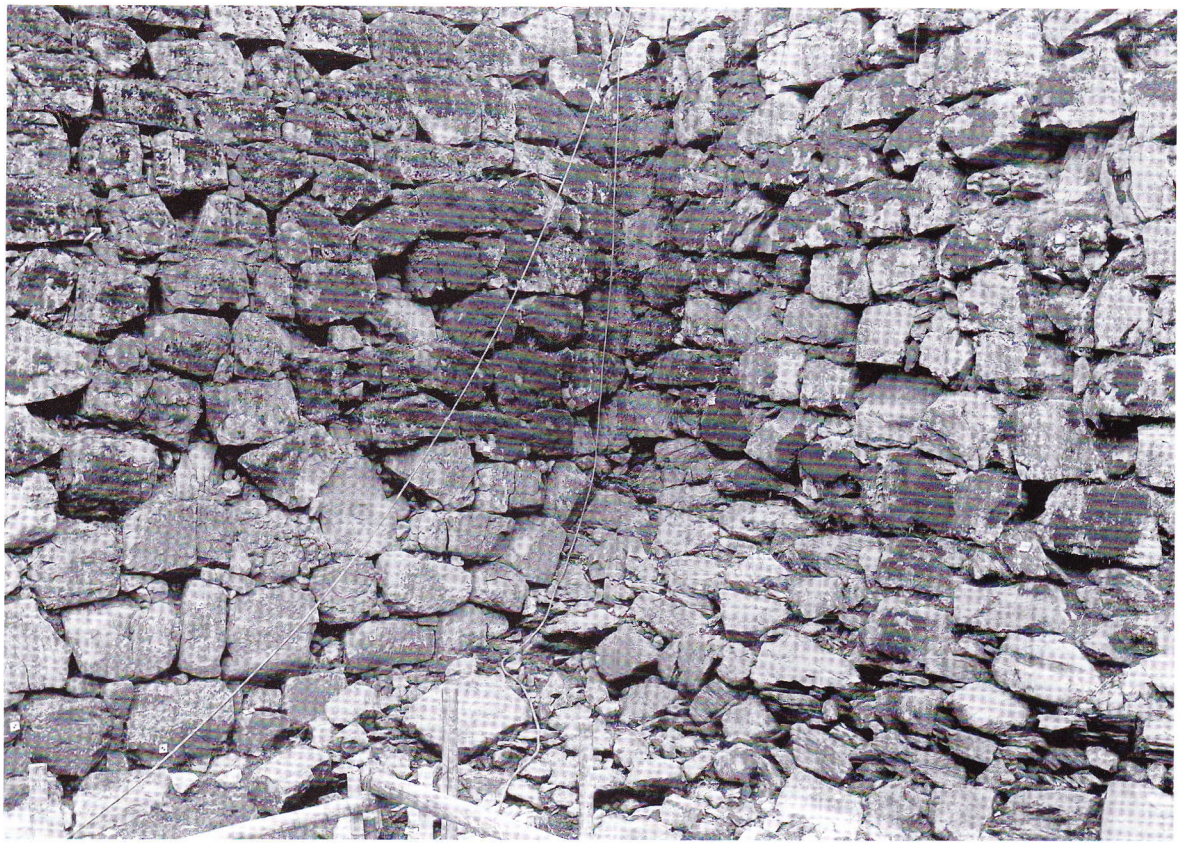
第３区　サブトレンチ３土層堆積状況（北西から）

第３区　サブトレンチ４土層堆積状況（東から）

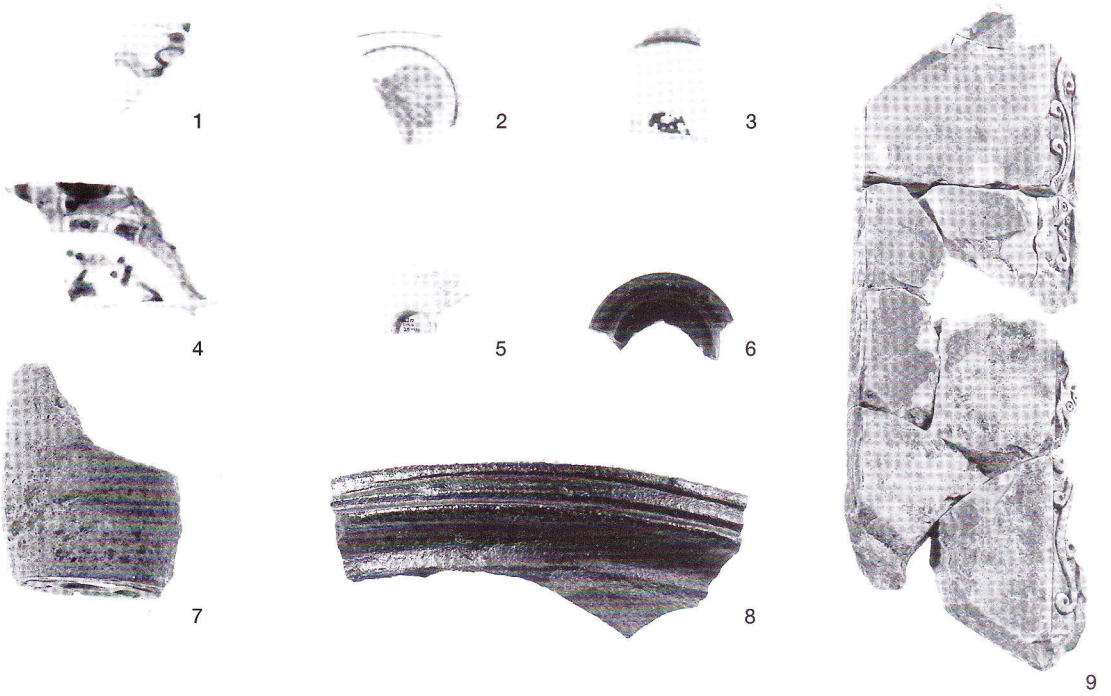
図版12



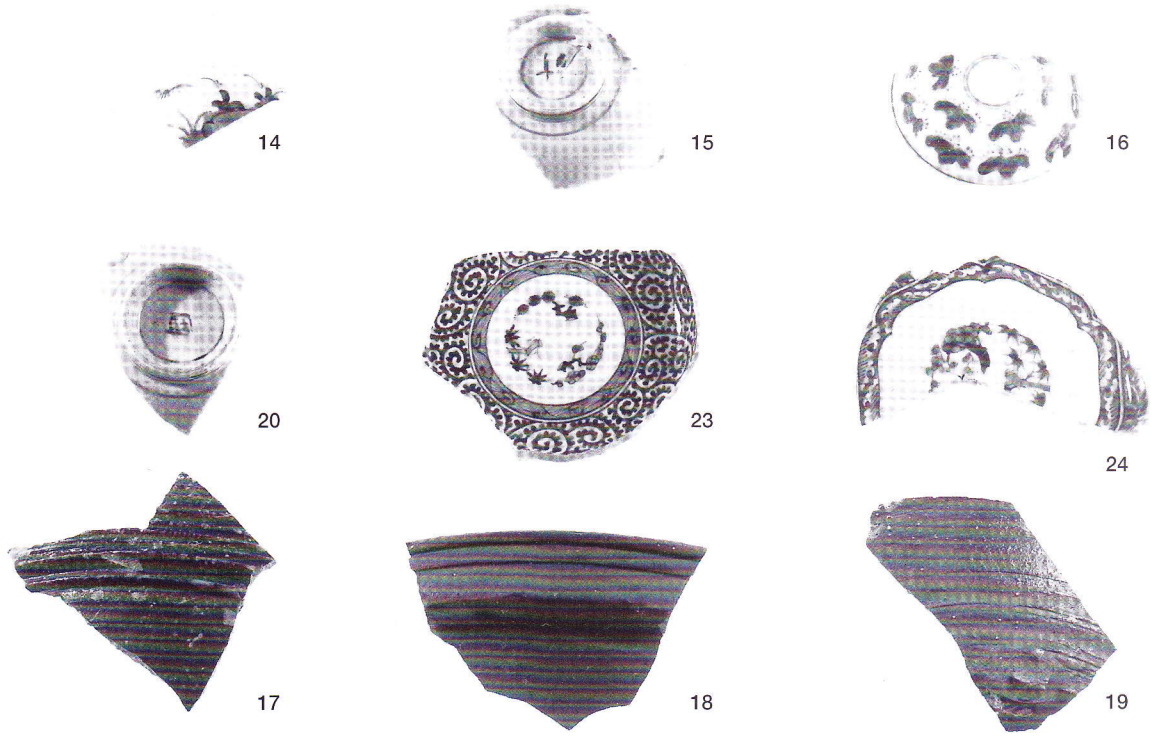
ＳＶ－３　構築状況（北から）



ＳＶ－２・３　隅角部構築状況（北西から）

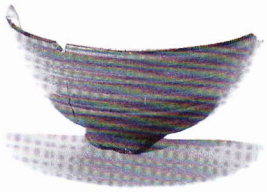


第１区出土遺物　肥前系磁器 1～3 碗、4 皿、5 紅皿　7 焼塩壺
土師質土器 9 盤　産地不明陶器 6 土瓶蓋、8 擂鉢



第２・３区出土遺物　肥前系磁器 14・15・20 碗、16 蓋、23・24 皿
丹波焼 17壺　堺焼 18 擂鉢　備前焼 19 底部

図版14



11

肥前系陶器　碗

22

肥前系磁器　碗

25

備前焼　鉢

26

産地不明陶器　徳利

29

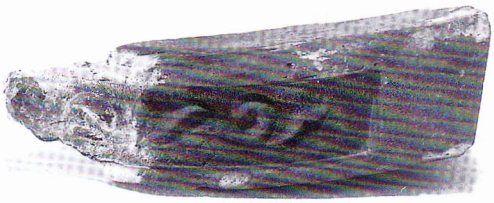
軒丸瓦

30

軒丸瓦

31

軒丸瓦

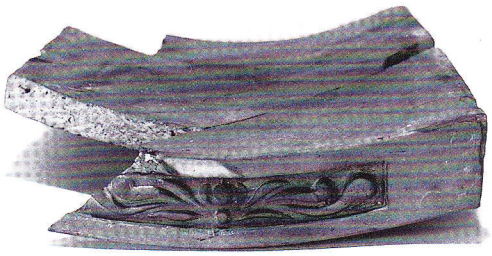


33

軒平瓦

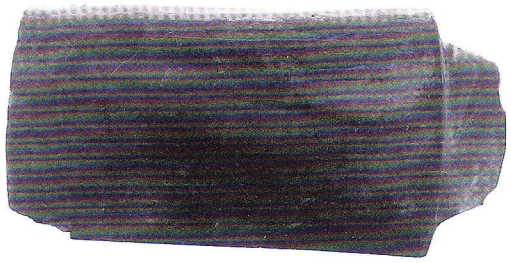
34

軒平瓦



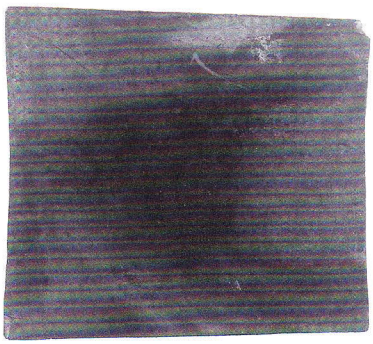
35

軒平瓦



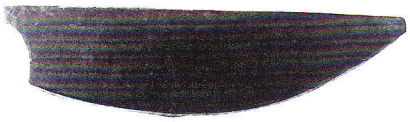
36

丸瓦



37

平瓦

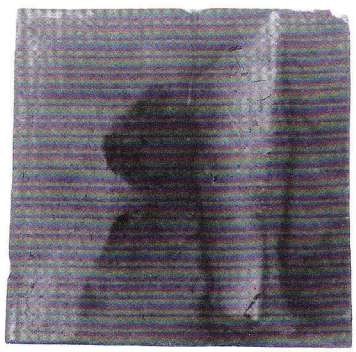


38

面戸瓦

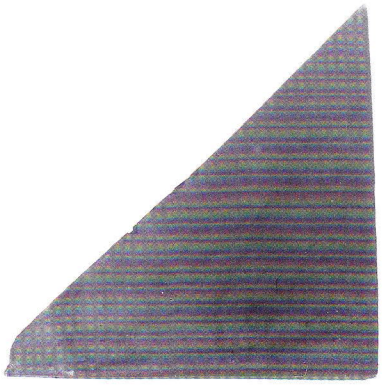
40

棟込瓦



41

塼

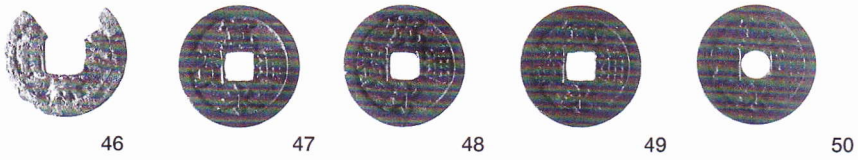


42

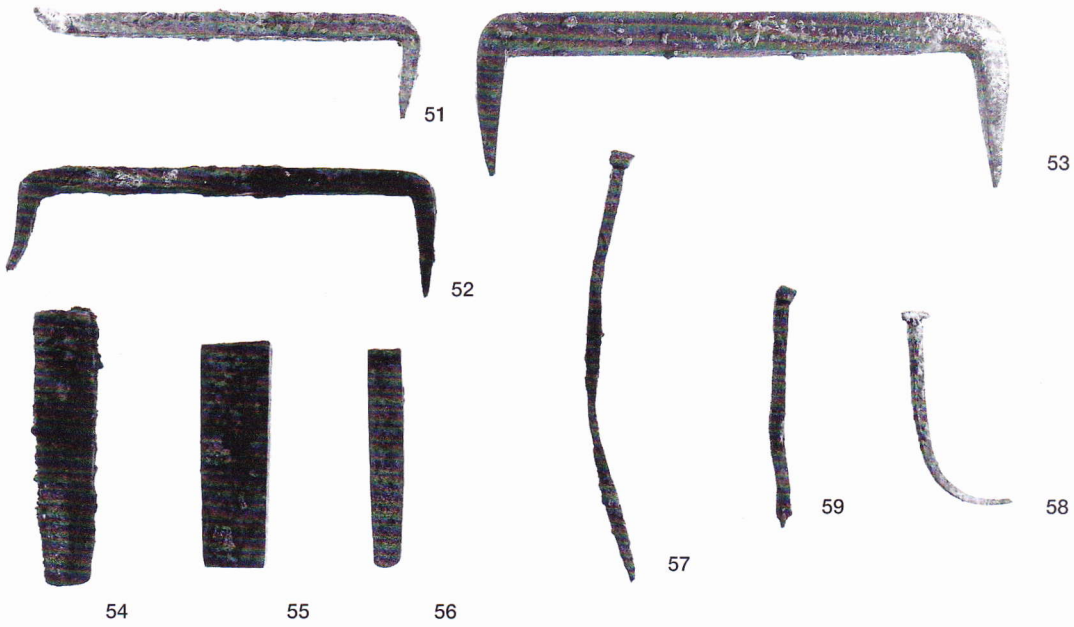
塼

図版16

43・44土人形、45泥面子

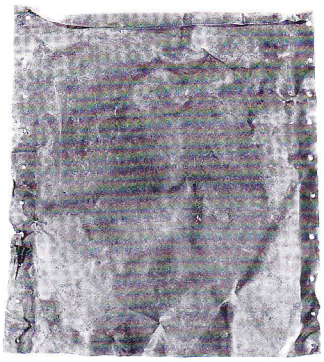


銭貨 46皇宋通寶、47～50寛永通寶

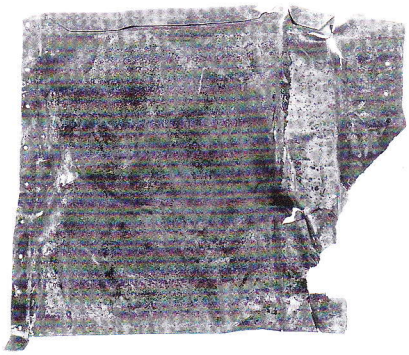


51～53鎹、54～56楔、57～59釘

60 銅板

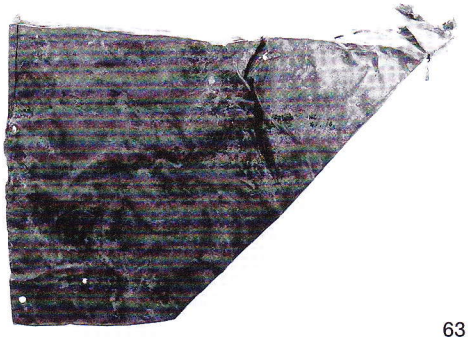


61 銅板

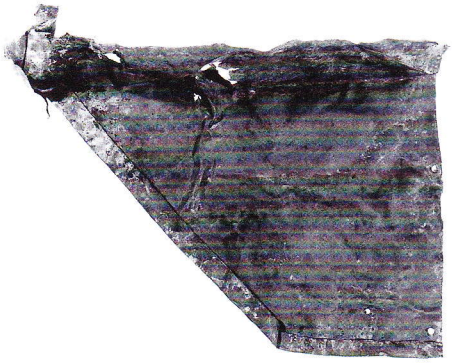


62 銅板

62 同裏面

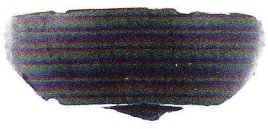


63 銅板



63 同裏面

64 銅板



65 漆器椀

図版18

66

下駄

67

木履

a

b

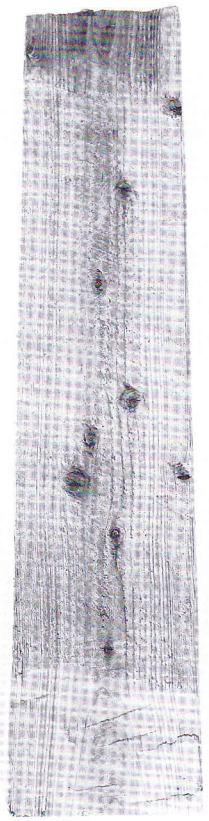
こけら板

72

c

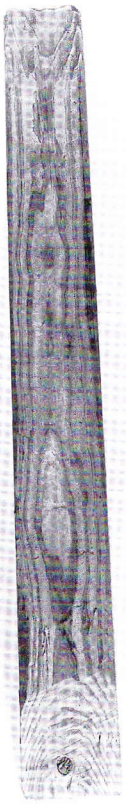
73

72込栓、73・C不明木製品



68

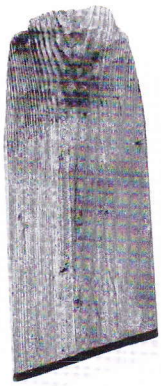
板材



69

板材

70



71

板材

平成12年3月31日 発行

史跡和歌山城　第22次発掘調査概報

編集・発行　(財)和歌山市文化体育振興事業団

和歌山市西汀丁29番地

印　　刷　西岡総合印刷株式会社

© (財)和歌山市文化体育振興事業団 2000